尊師対談集

特別対談

ビートたけし 麻原彰晃

バブルの後にくるのは、ストイシズムのエクスタシーしかない

撮影
半沢克夫
photos by Katsuo Hanzawa





相思相愛のふたりが、ついに念願叶い、思いゆくまで言葉を戦わせた。互いにインスピレーションでひかれ合ったというふたりだが、共通点は何か？　それは「バブルを経験した」ということだろう。ビートたけしには〝漫才ブーム〟があり、麻原彰晃そしてオウム真理教は、昨年日本を席巻した〝新宗教ブーム〟の洗礼を受けた。それはバブル。そしてそのバブルはあえなく崩壊した。生き残ったふたりには何があったのか？　バブルの膨張する力に負けない求心力。そしてストイックに自分を見据える力。異端と呼ばれることを恐れぬ勇気。これが彼らの共通点であり、勝因ではないか。ふたりは「ただ自分の気持ちいいことをやってきただけ」と言うだろう。しかし、日本が経験したバブルの波のなかでもっとも醜悪だったのは、「自分の気持ちいいこと」を見つけられずに金と物質に踊らされた人々だ。ふたりに語ってもらおう。バブル崩壊後に我々が見つけるべき本当の快感を。環境を破壊せずに、隣人を傷つけずに得られる本当の「歓喜」があるはずだ。それは、ストイシズムのエクスタシー。

あと5年で自殺、そう考えた時期もあった。

●――ビートたけし

91年12月30日放送のテレビ朝日系『TVタックル』で、ふたりの最初の出会いがあった。テレビという制約のなか、わずか5分程度の会談ではあった。しかし、たけしは「自殺するつもりだった」といった心情を吐露し、その会話に我々は、不思議なまでの奥行きの深さを感じた。それは、ふたりが初対面なのに、まるで大昔からの知り合いのように映ったからだろうか。ふたりは、「また。今度はもっとゆっくり話しましょう」と言って別れ、ここで再会を果たした。

――たけしさんの、麻原さんあるいはオウム真理教に対する発言や書かれたものを見ると、何か生理的な好感を持たれているような気がするんです。下世話な比較ですが、例の大川隆法さんよりも、麻原さんのほうに通じ合う部分が多いというか、そんな印象を受けるんです。

たけし　そうだね。生理的な好き嫌いというのは、軽くみられがちだけど、じつはかなり本質の部分じゃないかな。瞬間的な判断というか、いちばん最初に出てくるものだからこそ、いちばん当たっているような気がするんですよ。

麻原　たとえば結婚なんて、生理的な好き嫌いというかインスピレーションでほとんどが決まってしまうわけでしょう。私も、生理的な部分というのは本質だと思います。要するに、頭で考えるよりも深い意識状態での選択ですからね。

――生理的にインスピレーションでひかれ合うというのは、仏教でいう「因縁」なども関係してくるわけですか？

麻原　というより、因縁そのものだと思います。たとえば美女が何人もいて、そのなかから自分の好みの美女を選ぶという場合を考えてください。そういう場合はやはり、自分の過去の経験とか、あるいは「過去世」での自分の経験に基づいて選択しているわけですよ。芸能界を見ても、大変な美人がたくさんいるわけですが、そのなかで人気の出る人もいれば出ない人もいる。山口百恵なんて、決して絶対的な美人じゃないのに、あれほどの人気を得たわけです。過去あるいは過去世において縁があったからこそ、直観的にお互いのことがわかる。そして、ひかれ合うわけです。

ボランティアするより、捨てることに意味がある

――麻原さんは著書の中で「この世の現象はすべて無常を根本としている」と書かれていますよね。宗教というと、愛とか何とか、ウエットなものを説くというイメージがあるのに、その出発点は「無常」であると。一方、たけしさんのテレビなどでの活動にも、人間の知性というのは「人間は根本的に理論や知性では片づけられない」という認識の上に立つべきだ、という主張があるように思えるん

たけしさんの活躍の根底には、仏教観がある。●

——麻原彰晃

ASAHARA SHOUKOU

オウム真理教開祖。
86年、長年の修行の末にヒマラヤで悟りを得、日本でただひとりの最終解脱者となる。
〝イェシェ〟（完全絶対の神の叡智）に到達した瞑想家としてダライ・ラマ法王とも親交を結ぶ。
出家修行者900名、在家信徒約7,0000名。

です。そのあたりでも、共鳴する部分があったのではないでしょうか？

たけし　うん。以前に変な絵を見たことがあってね。飢えた虎の前に身を投げ出している絵なんですけど、それを見たときに「これだ」という気がしたんです。相手は虎ですからね。食べられちゃうわけですよ。普通は、虎に自分の身を投げ出して食わしてしまうことによって何か評価を得たいと思うわけでしょう？　自分を犠牲にして人を救ったとか。ところが、あの絵はただ、いきなり身を投げ出しているだけなんだよね。その行為に意味を持たせていない。やっぱり、人に奉仕していると思うこと自体、ちょっとインチキ臭いですよ。目の前に飢えた虎がいて、自分の体を投げ出して、ただそれだけというほうが本当のような気がするな。

麻原　今おっしゃった虎の話は、お釈迦さまが仏陀となるために、過去世から連綿と続けてきた修行について記述した『ジャータカ』とよばれる輪廻転生談のひとつです。体を投げ出すことによって称賛を得るよりも、捨てること、体を布施することそのものに意味があるという教えです。これは、仏教の世界で最高の悟りを求める場合に行われることで、たけしさんの言っていることは、まさにそのとおりだと思います。

たけし　そこらへんをもっと、麻原さんに聞いてみたかったんですよ。たとえば他人に小遣いをやったり部屋代を払ってやったり、自分の稼いだ金でいろんな人の面倒をみている人がいますよねえ。そこには快感があると思うんですよ。人の面倒をみてやってるんだという快感。でも、快感なんだから、それを捨てる勇気もあると思うんです。面倒をみてもらってる人は困るだろうけども、その勇気には、そういったものをスッ飛ばすだけの価値があるんじゃないかと。ボランティアの人なんか、世間から偉いと言われるけど、逆にそれをやらない勇気というのもあるような気がするんですね。

麻原　ふたつの考え方があると思います。ひとつは多くの人の面倒をみ、世話をする。そのことによって神々の世界に入っていこうという考え方。これが仏教の考え方です。もうひとつは、じっと観察する立場。これは、周りの世話をすることによって生じる歓喜とか、欲望とか、そ

BEAT TAKESHI

1947年、東京生まれ。
70年代後半の漫才ブームで一気にスターダムに。
その後はお笑いのフィールドにとどまらず、
文筆、映画のフィールドでも活躍。
「北野ファンクラブ」で見せるアナーキーな魅力と
シリアスな映画を撮るバランス感覚を持つ。

ういったものから離れるということです。このふたつの、どちらが偉大かというのは難しい問題です。どこに価値観を置くかということで、愛欲の世界に価値を見いだすか、そこから離れたものに価値を見いだすかということですから。ただ、最終的に解脱をして自我を超えた存在になるということは、たけしさんの言うように観察する状態に入るわけですから。それを偉大だとしても、それはそれで正しいと思います。

たけし　どうしても、快感を得ることが罪のような気がして。だから人に奉仕したり慈善事業なんかで快感を得るよりは、何もしないほうが、まだいい気がするんです。餓死しかけている子供がいて、その子に手を差しのべるというのと正面から見据えることを比べると、正視するほうが落ち込むわけですよ。ボランティアの人たちって、ほら、やたら元気で落ち込むのが嫌いな人たちでしょう？　ボランティアって、そういう貧しい子供なんかを見たくないというところからスタートしているような気がするんです。現実を見据える勇気がないというか、ね。

麻原　現実を直視するというのは、まさに仏教の考え方ですね。仏典の中にもこういう話がありますよ。お釈迦さまの弟子で、たいそう美しい娼婦に恋をした者がいた。この娼婦が死んだとき、お釈迦さまはその弟子を連れていき、「ほら、ここにお前の愛した娼婦がいる。これを抱いて、持って帰りなさい」と言ったんです。つまり、現実を直視せよと。仏教では、まず肉体の不浄を認識するための瞑想を行います。これはどういう瞑想かというと、現代でいう解剖学と同じです。美しい髪の毛があって、その下には頭皮があって、そこには血管が走っていて、そのさらに下には剥き出しの頭蓋骨がある。それを観想させるんです。それによって、たとえば異性の肉体に対する誤った考え、幻想を捨断するわけです。

——たとえば画家が貧しい子供を目の前にしたときには、その子にパンをあげることと、もうひとつ、その姿を画布に塗り込めるという選択があるわけですよね。

たけし　俺も画家だとしたら絵を描くだろうけど、それは、パンをあげるよりもはるかに葛藤するだろうね。心の中でどれだけ戦うかということで、精神的なスタミナが必要になる。でも、そこから逃げると、自分の心はガラガラと負け続けることになるわけで。それで一生懸命あらゆることを考えて、結局、その子を見る、ということになると思うんです。

麻原　そういう意味では宗教家は楽ですね。宗教家というのは、パンを与えながら、なぜ今、そういう状況に陥ったかを話してあげればいい。つまり、生き方を変える方向で教えを説きながら、パンを与えればいいわけです。これはまさに、俗に言うところの「カッコイイこと」で

すから、すごく楽なんです。

セックスより気持ちいい 本当の「歓喜」を追い求める

たけし　麻原さんを見ていると、ちょっと失礼な言い方かもしれないけど、宗教家として大成するとか神になることを考えると、普通の人よりも数倍遠いところから出発している気がするんですよ。もっと言えば、宗教からいちばん遠い人のような気もする。非常に科学的でもあるし。いちばん反宗教的なところから来た人のような。数学でいえば、普通の人が0からはじめるところを、マイナス10からプラス10に向かって突進しているような。でも、その遠いところから努力してきたからこそ、凄い力を使えるような気もするんですよね。努力の過程が我々とは違う気がするんです。

――科学的ということで言えば、オウムがやっている水中の修行も、テレビでバカにしたような発言をした人もいますが、科学に則してますよね。酸素が不足すれば脳はフル回転するわけですから。ラッシュしている最中のボクサーも、数学の難問に取り組んでいる高校生も、息を止めているわけですよ。

麻原　たしかに、私はもともと反宗教的というか、さまざまな現象に対してその真理を確かめながら生きていくタイプですから。そういう意味ではマイナス10からプラス10に突進しているというのは正しいと思います。でも逆に、マイナス10の苦しみを知っているから、今そこにいる人たちに対して、早くそこから脱してほしいという気持ちになるんだと思います。はじめからプラス8とか9とか、いい状態に馴れていらっしゃる方は、苦しんでいる人のことが理解できないんじゃないでしょうか。私の眼は、3年半ぐらい前から視力を完全に失ったんですが、そのとき、私は大変喜びましたね。肉体の苦しみを経験できているわけだから、それを嬉しいと考えられれば最高じゃないでしょうか。





たけし　俺はいつも「振り子、振り子」って言うんですよ。マイナス10まで振れないヤツはプラス10までいけないと。はじめにマイナス2までしか振れないヤツは、プラスにいっても、やっぱり2までしかいけない。だから、お笑いの仕事がマイナスだとは言わないけども、お笑いで10の仕事ができればシリアスな芝居でも10のことができるんじゃないかと思うんです。だから俺はお笑いをやめない。どう

麻原さん、そのうち同じ土俵で……。
——ビートたけし

も、片方ばっかりやると振り子みたいな振幅ができない気がしてね。生きているなかでも、昔だったら耐えられないような嫌なことがあっても、今はわりかし耐えられてしまう。「ひでえなあ」と思っても、絶対にその逆もあると思うからです。

麻原　仏教の修行のなかにも「忍辱(にんにく)」という段階があります。忍辱というのは、要するに罵倒されるとか、あるいは嘲笑されるような状態のことです。その修行を積んでいけば、最終的には、たとえば自分の肉体を傷つけられたとしても、それに対してまったく心を動揺させることなく、相手に慈愛を持つことができる。たとえば、たけしさんの仕事でも、称賛する人もいれば批判する人もいるでしょう。そういうときに、逆に批判されることに対する訓練をなさることが、仏教でいう忍辱の修行になるんじゃないでしょうか。

私なんかも、いろいろなテレビ局から出演の依頼がきますが、なかにはからかい半分のところもあるわけですよ。「あそこはあなたを騙(だま)そうとしている」とアドバイスしてくれる人もいますが、私は出てみる。すると、画面に登場した瞬間から、徹底的に罵倒されるわけです。私は、それが嬉しい。テレビの画面を通じて日本国民の前で映像として罵倒される。これ以上の仏教的修行はありませんよ。よく、ひどいことを言われているのに麻原彰晃は微笑んでいると言う人もいますが、あれは微笑みでなく、歓喜の表情です。

——今、「歓喜」という表現を使われました。歓喜とか快感ということで言えば、オウム真理教はセックスに対して禁欲的なわけですけども、逆に言うと、セックスよりも気持ちいいことを純粋に追求しているんじゃないかと思うんです。

麻原　それはそのとおりです。セックスで得る快感というのは、たとえるならば貯金を使っているようなものですから。使えば、どんどん減っていく。ところが逆に、使わないで溜めていくとどうなるかというと、ある段階で、貯金が減らずに、永久運動のように快感・歓喜が体全体を巡りだす状態がきます。そういう意味でも、純粋に歓喜を追求するというのは正しいことだと思いますね。これはインド―ヨーロッパ・グループに属するすべての宗教が追求していることでもあります。

たけし　俺もセックスは、しないわけないんで、してるんだけども、セックス以上の快感をもたらす精神状態があるというのはわかる。コリン・ウィルソンなんかを読んでも同じことを言ってますよね。セックスの気持ちよさというのも、しょせん精神で感じるものだから。自分も昔、松竹演芸場なんかで漫才やってて非常にウケたとき、あっ、これはセックスより全然いいと思ったこともありますし。結局、感じるのはすべて精神なんだと思いますよ。だから、本当の快感を得るためには、精神のコントロールが大事になっ

セックスで得る快感は、貯金を使うようなもの。

――麻原彰晃

てくると思います。でも性欲というのは強いからね。そうは思いながらも俺なんか、ついフラフラと〝おねえちゃん〟のところに行っちゃう。

麻原　でも、仏教の世界でも、出家したらいけないけども、在家の場合は、奇麗な女性がいたら、それに近づいてはいけないということはないんですよ。人妻はいけないけども、それ以外は大丈夫です。

――男性が結婚していても?

麻原　そうです。

たけし　ほっとしたりして(笑)。

――やっぱり人間というのは、表面的には苦しいことをやっているように見えても、無意識のうちに気持ちいいことを選択しているような気がしますね。非常に乱暴な言い方になってしまうけども、戦争に行って死んだ人も、深層意識の部分では、行きたいから行ったという見方もできると思うんですが。

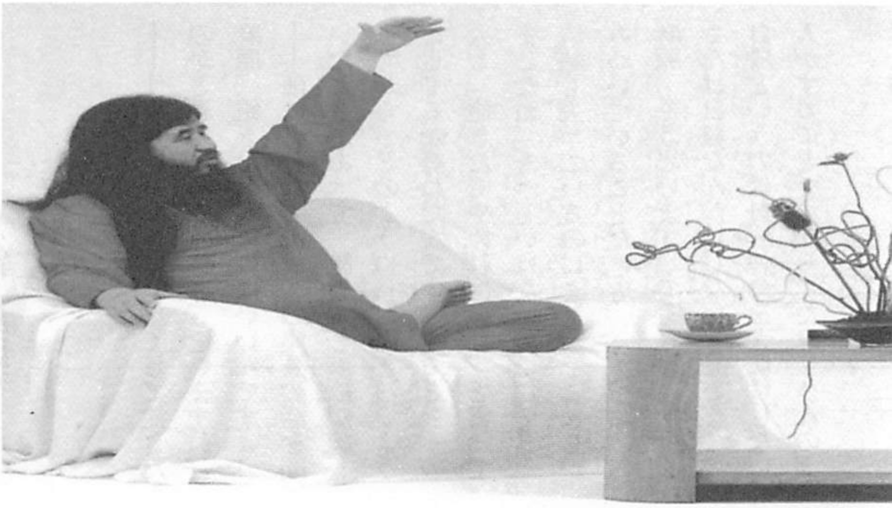


たけし　そうだと思いますね。選択の自由というのは、常に危険と背中合わせのものですから。たとえば殺すことと殺さないことを選択するとして、神さまに怒られそうだからといって殺さないほうを選ぶのは、神に対して自由ではなくなっているわけでしょう。自由のなかで生きていれば、悪いことからの誘いもあるし、いろいろなことがあるわけですよ。逆に、そういう誘いや迷いがない世界を作ってくださいと神さまにお願いするのは、今度は自分の精神に対して自由ではないわけでね。だから、そういうところで生きていくしかないと思うんですよ。人間は、進化してると言われてるけども、俺は進化なんかしてないと思う。まだまだ自分をコントロールできてないんだもの。自分を自分でコントロールできるようになるというのは、俺にとっては最高の夢なんですよ。自分の病気は自分で治すとか、欲望をコントロールするとか。みんな、それをしないで、むしろ退化した部分もあると思う。それが機械であり、文明ですよ。自分をコントロールする代わりに、

コントロールできる自動車やコンピュータを作ってきて、その弊害が今、出ているわけでしょう? 地球の環境問題なんか、人間が自分自身をコントロールできれば、すぐに解決できることですよ。

麻原　私の経験でこういうことがありました。瞑想の最中に、チベットにいます私の師匠が出てきまして、「ありがとう、ありがとう」と言うんです。これは何かあったなと思いまして、すぐに弟子を連れて日本をたった。チベットに着いてみると、師匠は亡くなっていました。ところが、そのことを知らせるための電報は、まだ日本には着いていないはずだと、チベットのお弟子さんたちがビックリしているわけです。つまり、何が言いたいかというと、現代文明はたしかに便利さを提供しているけども、その反面で、その便利さを提供する機械がなければ人間は何もできないようになってしまった、ということです。人間は元来、機械なんかがなくても幸せになれる資質を持っているのに……。

たけし　物理の世界では「光がいちばん速い」と言われますよね。最近は光より速い物質も見つかったんだっけ? でも俺は、人間の意識のほうが速いと思う。だって「ニューヨーク!」と思ったら、その瞬間にニューヨークを意識できるわけですよ。飛行機で行けば10数時間かかるし、光でも0・05秒ぐらいかかる。やっぱり人間の意識が最高だと思うね。



麻原　私たちは瞑想によって過去や未来を見るわけですが、これも意識が光より速いからこそ、できることですよ。アインシュタインが相対性理論で説いたとおりです。こんな最高の乗り物を持っているのに、人間はまだ、それに気づかずに一生懸命、罪悪をエンジョイしている。本当にもったいないことです。

お笑いは2番目、本当に好きなのは精神世界

——そろそろ、テレビでおっしゃった「あと5年で自殺するか引退」という言葉の真意を聞きたいのですが……。

たけし　まあ、自殺する気はなくなりましたけどね。5年ぐらい前までは、死ぬことが人一倍怖かったんですよ。それが、最近になって怖くなくなった。どうして怖くなくなったのかなと考えると、それ

は、仕事で成功したからとか、そういうことじゃないんです。いい仕事をしたいとか、有名になりたいとか、そういうことを考えながら仕事をしてきたわけだけど、あるときふと思った。生きることも死ぬことも、ほとんど変わらないんじゃないかって。心とか魂があるとすれば、体がなくなってもいいような気がしたんですよ。そう考えて、ずいぶん楽になった。前みたいにイライラしなくなりました。

——生きることも死ぬことも同じ、とおっしゃいましたが、生きることが怖いときは死ぬことも怖い。生きることが怖くなくなれば、死も怖くなくなる。そんな気もしますね。引退というのは？

たけし　お笑いというのは、俺にとって2番目にやりたかったことだから。いちばん好きなのは、やっぱり精神の世界。いろいろ悩んだり考えたりするのが、本当にやりたかったことなんですよ。ただ、よく言うでしょう、成功したければ2番目に好きなことをやれって。俺もお笑いでいちおう成功したわけだけど、やっぱりチラチラしてくるわけです。本当にやりたかったことがね。

——仕事でいろいろやり尽くして飽きたのかと思ったんですけど、違いますね。

麻原　飽きたらやめればいいんですよ。

——前に有名なサーカスの座長の話を聞いたことがあって。飽きると事故が起きますから、どのようにして飽きないようにしてるか尋ねたんです。すると、その人も「飽きたらやめればいい」と言ってましたね。「もっといけないのは、飽きて、情熱も失っているのにまだ、そこにしがみついていることだ」と。

麻原　そう思います。でも私は、たけしさんは自殺なんかはしないと思います。自殺というのは自分の命を大切にしない人がすることですから。たけしさんのように人生を大切にする人は、そう簡単には死にませんよ。

——どうして、たけしさんが人生を大切にしていると？

麻原　人生を大切にしない人は、たけしさんのように人生を考えたりはしません。

たけし　そうね。大学を中退しようと思ったときからだから、かれこれ20年以上もあれこれ考え続けているわけですよ。やっぱり人間の精神が考えだすことは、すべて実現する可能性があると思うんです。イメージが貧困な人は、できうることも少ない。自分の発想からいかにかけ離れたことをイメージできるか。それができないと、人間はだめだと思いますね。



発想なり考え方を拡げる必要があると思うんですよ。その拡げ方を考えるのが、俺にとってはいちばん面白いことなわけで。それは結局、宗教の世界なんでしょうね。

麻原　だから、前から言っていることですが、たけしさんは根本的な部分で仏教観というものを持っていますよ。でも、「俺はどこの宗教団体にも入らないからな。誘うなよ」と釘を刺されてますから…。

たけし　いやいや。麻原さんと同じ土俵に登場しますから。そのときは……。

——最後に、今は"飽食の時代"とか言われるわけですけども、そのなかで、おふたりが特に意識して禁欲的にしていることを教えてください。

たけし　なるべく食べないようにする、ということかな。昔、浅草にいたころに比べると、今は自分ひとりでは使い切れないほどの金を稼いでるわけだけど、相変わらず高級なレストランなんかへはひとりでは行けない。バチが当たるような気がしてさ。あそこの中華料理がうまいなんて聞くと、行ってみたいんだけど、怖いからとりあえず5人ぐらい連れてってご馳走する。自分で食っちゃいけないような気がするんですよ。

——麻原さんは？

麻原　そうですね、なるべく自分のことを考えないようにする、ということでしょうか。大乗の発想のなかにある「自己を捨て去る」ということができるかどうか。それが私の課題です。

新宗教ブームというバブルでは、単に信者数を競うような宗教団体が現れ、泡のように消えていった。そのなかにあり、安易な妥協を拒み続けることで生き残った感のあるオウム真理教と麻原彰晃。一方、芸能界での成功で多くの収入を手にしながらも、素直にそれに困惑するビートたけし。このふたりの視界には、「物質の豊かさ」の向こう側が、しっかりと捉えられていた。Ⓑ

対談のあとで……。

「面白いよなあ、麻原さんて……」

対談を終え、帰りのエレベーターを待つ間に、たけしがボソッと言った。

「話してますます、宗教から遠い人のような気がしてさぁ」

そこに麻原が現れ、我々は同じエレベーターの密室の中にいた。

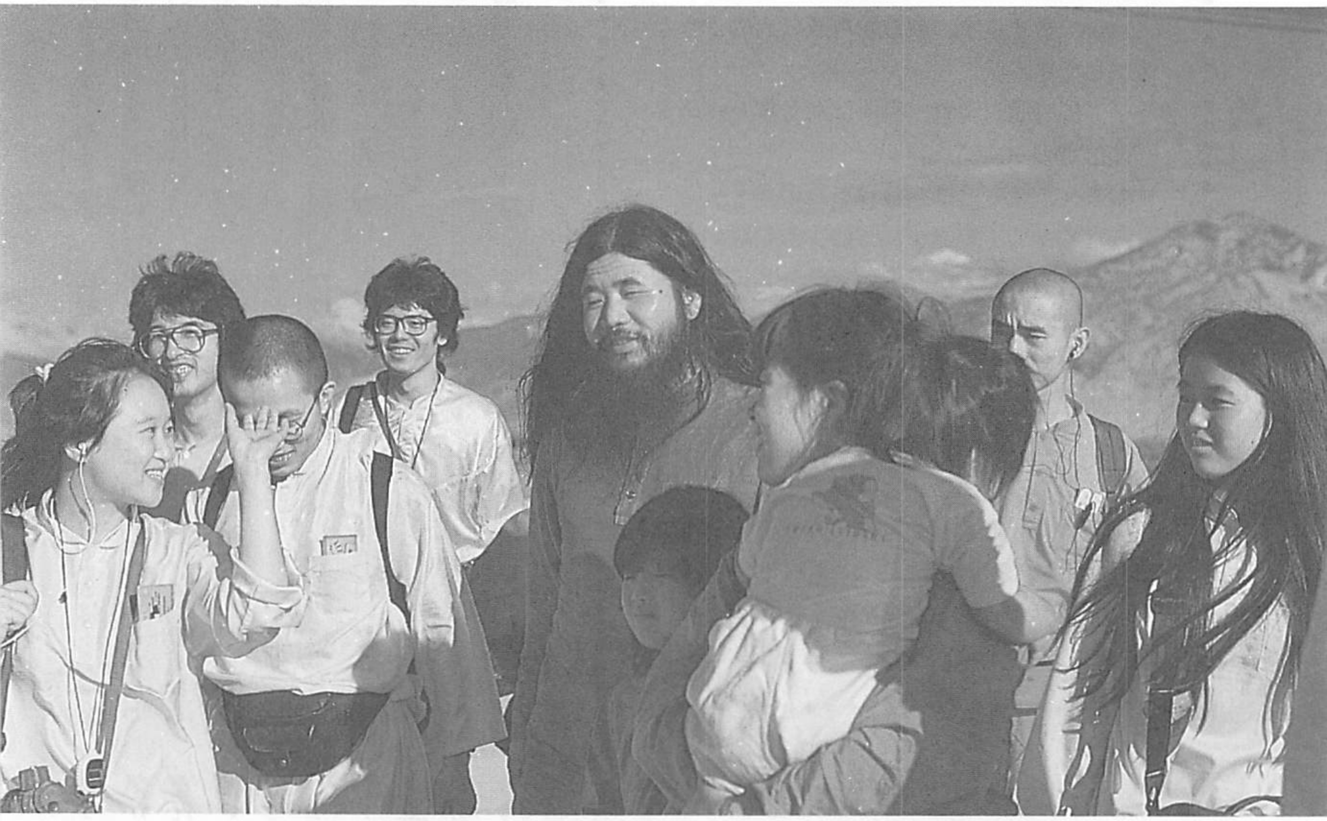
「おまえ、皆さんに挨拶はしたのか？」

密室の中で、麻原が傍らの少女に聞いた。眼の見えぬ麻原の手を引いてテレビにも出ていた、まだ中学生ぐらいの少女だ。少女は俯いたまま恥ずかしそうに首を振った。

「だめじゃないか。挨拶はちゃんとしなきゃ。ああ、これ、私の娘です」

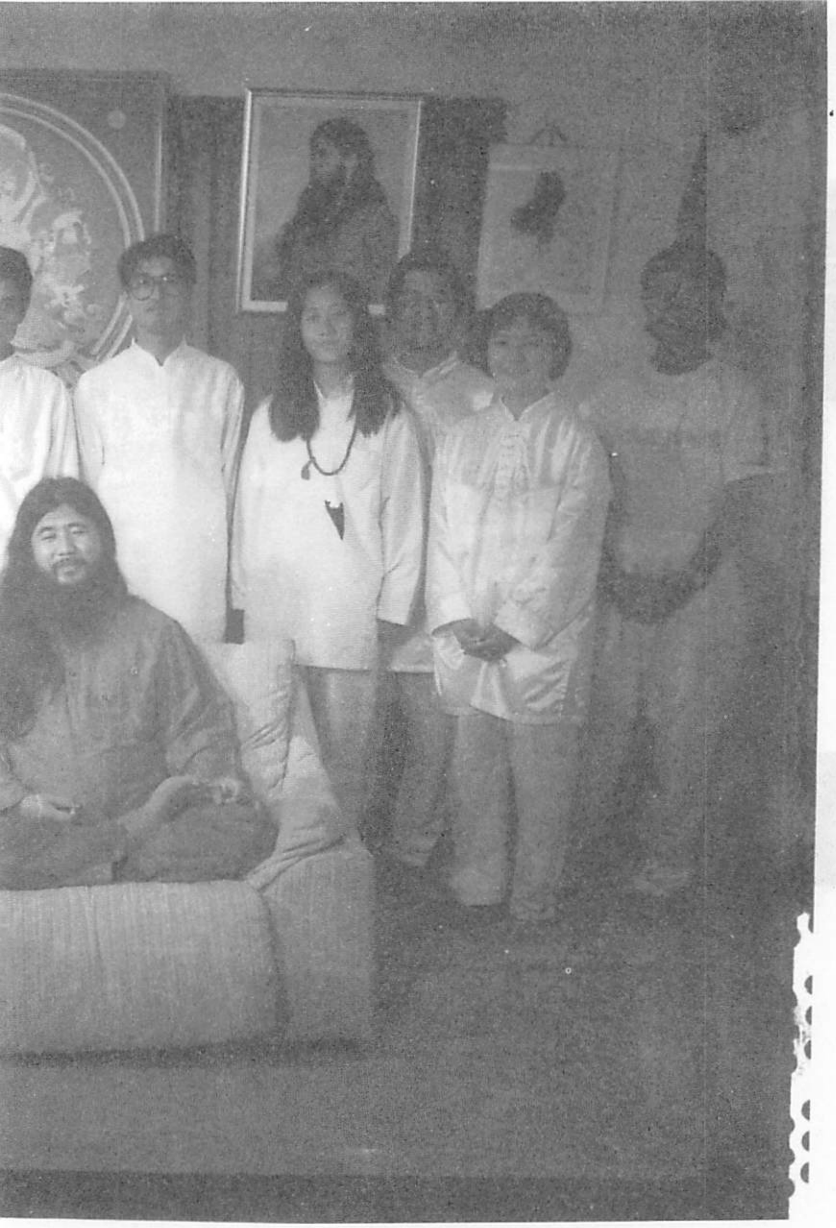
そこにあったのは、よき父親としての麻原彰晃だった。何も言わなかったが、たけしはまた「面白いよなぁ」と思ったのではないか。代わりに「今日は気持ちのいい時間を過ごしました」という言葉を残し、去っていった。

構成/田中茂朗、美術協力/GOOBIE HOUSE、撮影協力/SAZABY


1991年8月　チベットにて

麻原彰晃 VS. 中沢新一

中沢新一氏
1950年、山梨県生まれ。
東京大学大学院修士課程修了。専攻は宗教学。
78年から、ネパールやインドのラマ僧のもとでゾクチェン密教を修行した。その後、東京外語大アジア・アフリカ言語文化研究所助手。
現在、中央大学教授。著書に『改稿 虹の階梯』(中公文庫)、『チベットのモーツァルト』等。



麻原彰晃との対話――

オウム真理教はそんなにメチャメチャな宗教なのか。

●中沢新一

中沢　僕が麻原さんにこうしてお会いするのは、2年ぶりです。あの時も、2年前のちょうど11月でしたが、今回と違って、ふたりともとても緊張した状況の中にありました。オウム真理教は、その時ほとんどすべてのマスコミを向こうに回して、孤立していましたし、僕のほうも、その対談が、自分にとっても大きな社会的な意味を持ってしまうだろうという予感で、やっぱり緊張していました。それに比べれば、今回の対談はリラックスしています。それというのも、この2年間で、日本人の宗教に対する態度が、大きな変化を示すようになってきたからです。2年前に麻原さんたちが「狂気の悟り」というような、密教や禅のことを少しでも真剣に勉強したことのある人なら、なんでもないようなことを主張した時には、世間は一斉に目を剥いたものです。ところが、今では喫茶店でもバーでも飲

み屋さんでも、一番の話題はなんといっても宗教で、超能力や死後の世界のことから、悟りと道徳とはどう違うなんていう話題まで飛び出して、知らない人が聞いたら、それこそ、日本人はなんて宗教的な民族なんだと、勘違いしてしまうような状況になっています。麻原さんご自身は、この2年間の急激な変化を、どのように見られているのですか。

麻原　私は、その変化の一番大きな原因は、ソビエト帝国の崩壊に象徴されているものだと思います。今までの社会での一番の対立は、物質の領域における「制約経済vs.自由経済」の対立でした。それが今や、物質の領域では一元化が進行して、その対立はあまり意味を持たなくなってきた。そうなるといよいよ、最終的な「物質vs.精神」の対立の時代が始まることになります。ですから、物質の領域における一元化の進行は、新しく始まる二元化のプロセスの先触れということになると思います。そうなると、よくしたもので、世間もマスコミも、そちらのほうに心が動いてくる。ということは、世界全体の波が、もうそちらのほうに向かって動き出しているということになるのではないでしょうか。



日本に注がれる神々の力。

中沢　でも、それがなぜこの日本で、という疑問は残ります。日本人は長い間、こんなにも宗教的でない人々はいない、といわれてきたような民族です。その日本人が今の世界でもちょっと例がないくらい熱を入れて、宗教に関心を持ちはじめている。これについて、それは、世界に起ころうとしている事態に、日本人が重要な位置を占めている証拠なんだというふうに考える人たちもいます。麻原さんも、やっぱりそうお考えになりますか。

麻原　はい、そうだと思います。ただ、じゃなぜそうなのか、ということについての、ちゃんとした説明はないように思います。私の考えでは、それはヨハネの福音書に語られていることに、関係しているように思われます。そこには、世紀末に現れる救世主は東方から稲妻のように西方にやってくる、と表現されています。では、そこでいわれている東方とはどこか、といえば、インドはそこにひっかからないんですね。日本か、韓国か、中国か、ここらへんしか上ってこない。なぜかといえ

ば、そういう東方は、物質文明を完全に体験した上で、物質性よりも高い、価値のある精神性が存在するんだ、という打ち出しができなければならない。そうなれば、その中では日本しかないというふうに見えるのです。そういう役目を日本が背負わされていて、こんなことをいうと変に思われるかもしれませんが、そのために今、神々の力が、日本に注がれはじめているんじゃあないでしょうか。

中沢　同じ問題を、こんなふうにも考えられるのではありませんか。自由経済というのは人間の無意識の欲望に、外側からのコントロールを加えないで、経済活動を行わせた上で、社会をうまく運営しようという考えに立っていますでしょう。ところが、そういう自由経済が発達してくるのを見て、19世紀のマルクスたちは、そんなふうに欲望を自由状態にしといたら、地球は今に大変なことになってしまう、と考えて、社会主義の思想を打ち立てようとした。人間が本当の幸福にたどり着くためには、経済の欲望を、社会の力でコントロールしなければならない、という制約経済の考えで、それが科学信仰なんかとごちゃまぜになって、20世紀に大きな影響力をふるってきた。ところが、20世紀も終わりが近づいた今、社会や経済のデザインとしては、やっぱり資本主義のほうが優れているし、人間を少なくとも物質的には幸福にできるのだ、ということが、誰の目にも明らかになってしまった。こうして、経済システムの分野では、ものすごいスピードで、一元化が進みはじめています。そのためにソ連は崩壊しました。そして、人類はその次の段階のプロジェクトに、入りはじめています。物質的な欲望を、自由に放置しておいて作られた社会の中で、人間の倫理性とか、精神性の高さとかいう問題を、これから先どんなふうに追求していったらいいのか。共産主義は幻想にすぎなかった、といって、捨て去ってしまうのは簡単ですが、倫理の基準を、社会とか政治とかいうような、外の世界のものに委ねてしまうことができないとなると、それは個人個人が、自分自身をどう作り上げていくか、というとても主体的な問題になってきてしまうのです。現在の日本の宗教ブームの中には、確かに、まじめな面があって、単に超能力や霊界への関心として片付けてしまうことのできない、そういう倫理への関心みたいなのがあって、それが自由経済が一番発達したこの国で、今宗教への関心という形で、現れているんじゃあないでしょうか。確か麻原さんも『朝まで生テレビ』で、道徳と宗教をいい加減にいっしょくたにするな、と語っていましたね。

道徳を強調する日本の宗教は、大抵が保守支配を支持している。

麻原　はい、それは道徳や倫理にはいくつものレベルがあるからです。普通に道徳と今いわれているものは、為政者に都合のいいような社会を作るため、人民を教育するための道具であるという側面が、非常に強いと思われます。道に落ちているゴミを拾うのは確かにいいことです。それによって、人間はきちんとした行動をとることができるようになります。しかし、そのレベルに止まっていては、結局は、為政者や支配者に都合のいい社会の一員であることしかできません。

密教の持つ未来的可能性。

中沢　道徳を強調する日本の宗教は、大抵が、保守支配を支持していますものね。

麻原　ところが、ブッダの叡智、これを私たちは「サキヤ神賢」と呼んでいますが、それはブッダの時代であっても、逆に王を支配なさっていました。サキヤ神賢は偉大な力を持った智慧ですので、社会を支配するものにとって都合のよい、世俗的な道徳を、はるかに超え出ていました。道徳のレベルに止まっているかぎり、私たちはそのような智慧に、たどり着くことはできません。でも、そういう時代は、長くは続きません。道徳は大抵の場合、為政者の道具として、使われてきました。そのために、資本主義が登場する前の時代にあっては、いつもこういう道徳が、社会思想のバックボーンになっていたのだと思います。

中沢　資本主義の登場は、そうしてみますと、道徳といわれてきたものとは、根本的に質の違う、新しいタイプの倫理の出現を求めてきたのだ、ということになりますね。そうすると、宗教が古いタイプの道徳をそのまま持ち上げたりすると、資本主義をベースにしてその上に安定した保守的な社会を作ろうとしている勢力を、そのまま肯定してしまうことになる。それでは、宗教が持っている、現実の世界に対する批判力を失ってしまうのではないか、ブッダの叡智を道徳のレベルに引き下げてしまうのではないか、とこんな理解でいいですか。

麻原　はい、そうだと思います。今や人間は、道徳のレベルを抜け出て、人間よりも高い世界とコンタクトを取ったり、あるいは実際に、高い世界の生命体になっていくための作業を行わなければならない必要が出てきているのだと思います。

中沢　そこで、密教というのがクローズアップされてくるのでしょうね。今までの社会の道徳は、人間の欲望を抑えたり、外側の規律で、それをコントロールしようとしてきましたが、資本主義は、本当はそういうものを解体してしまう力を、持っていました。それは一方では、とても不毛な、やりきれない社会を作り出してしまうことにもなるので、昔ながらの道徳に戻ろうとする衝動が、現れたりする。でも、人間が新しいレベルに、本当に踏み込んでいくためには、欲望が自由でありながら、しかも高い霊性を持った生き物であるためには、どうしたらいいのかという新しい倫理の探究が、必要になってくる。ところが、密教はごく早い時代から、そういう探究をやってきた。僕は、密教の持つそういう未来倫理的な可能性に、注目してきました。今のお話をうかがっていると、麻原さんがなぜ、密教の価値を強調してこられたのか、分かる気がします。でもそれにしてもオウム真理教の初期のやり方というのは、ずいぶん粗っぽいところがあったとは、思いませんか。(笑)

麻原　おっしゃるとおりで、初期の段階で、粗っぽさが目立ったのは事実だと思います。ただ、私の考えとしては粗っぽくてもいいから、まず全体系の核心部分にストレートにたどり着いて、そこで声を上げて、大きな流れを出して、それから細かい部分をていねいに作っていけばいいじゃないか、と思うのです。現在のオウム真理教は、次のステップに入りはじめています。危険さや粗っぽさをできるだけ取り除いて、マニュアルの好きな若い世代の子にも、なじみやすいような教え方に、作り変えてきています。チベット仏教のやり方に、いっそう近づいているともいえます。そこで今のオウム真理教では、まず、小乗の教えを身につけさせ、生活の規範をコントロールしながら、意識を上のほうに、つまり神様のほうに向けさせていく訓練が行われます。個人の煩悩を捨断していくための訓練です。次の段階では、ある程度個人の煩悩を、コントロールできるようになった人を、大乗の思想のほうに展開していくことが行われます。そして最後に、小乗と大乗の両方が達成できた段階で、高度なタントラの教えに入っていきます。

中沢　そういう変化というのは、麻原さんのまわりに集まってくる、若い人たちの中に見



られる変化とも、対応しているのではないですか。

麻原　はい、おもしろいことに、初期の人たちのほうが、やっぱり修行好きで勉強嫌いというところがありましたが、今は逆で、勉強好きで、修行はそこそこという感じの人が、多いようです。要するに、今の若い人はテーラヴァーダ、つまり南伝仏教が好きで、教えを記憶したり、それにのっとった生活をするのが得意で、これに対して、昔のタイプの人というのは、タントラ的な修行が好きなのです。しかし、私はそれは両方とも欠陥だと思っているんですよ。

中沢　今の若い子の精神が、テーラヴァーダ的であることの原因は、どこにあるとお考えですか。

麻原　学校教育でしょうね。受験体制とか、とにかく学ぶことには、ある程度慣れているけれども、身をもって体験することには慣れていないですから。

中沢　初期のオウム真理教は、そういう学校

神秘力とは、閉ざされた魂を自由に解放し、進化させるものを指す。

教育に対して、強烈にノーと言っていましたでしょう。そこから脱出して、出家しなさいと語っていた。でも、今のお話をうかがっていると、そういうふうに子供が作られちゃったのは、もうしようがないから、そういう子供にふさわしいテーラヴァーダ的なやり方を採用して、おいおい子供を作り変えていこうという、ソフトな変化みたいなものが感じられますね。それにつれて、オウム真理教に対する世間の評価も、急激に変わりはじめているのではないでしょうか。

超能力が持つふたつの面。

麻原　オウム真理教自体は、2年前も今も、その実態は変化していません。しかし、この世にあるものは、実態と違うイメージの力によって苦しめられなければなりません。オウム真理教に関しても、流される情報によって、ある時は否定され、またある時は肯定される。だから、たとえ今肯定されはじめたとしても、それは必ずしも真実を見ているものではないかもしれません。それに、経験の囚われということもあります。アインシュタインが相対性理論を発表した時にも、教授たちの大半はそれに反対したでしょう。それは教授たちの経験してきた学問が、アインシュタインの新しい思考に、ついていくことができなかったからにほかなりません。確かに、今の日本で宗教的なものに対して、経験の囚われということは、少し変化しはじめているのかもしれ

ません。でも、イメージの不確かさは、ますます増大されているのではないでしょうか。要するに、イメージによる評価によって、ぐらついたりしない、堅固なものを作り出すことが、一番重要なのだと思います。

中沢　現在の日本の宗教ブームでは、超能力がとても大きなテーマになっています。日本人はもともとアニミズム的な体質が強いところがありますが、その体質が、無意識を剥き出しにして、社会の表面に浮上させようとする今の資本主義的なシステムによって、生(なま)な形で、どんどん表に出はじめている。超能力や呪術的なものへの関心は、そのアニミズム的な体質と結びついています。麻原さんは、この超能力や呪術的なものへの関心を、どのようにお考えになっていますか。

麻原　超能力にはふたつあると思うんです。ひとつは、完全に魂を堕落させる超能力ですが、もうひとつは超越的な魂を作り出していける超能力です。オウム真理教では、無明のことを、非神秘力といっています。魂が広がりと深さを持っていくのをはばむ力、それが非神秘力です。魂が無明に閉ざされていますと、自分たちの生きている世界とか、生きているうちに自分の体験したことだとかを、すべての現実だと、考えるようになります。しかし、私たちが、唯一の現実だと信じているものも、無数にある現実のひとつにすぎないわけですから、そこに閉ざされているうちは、魂には、広がりも深さも出てきません。神秘



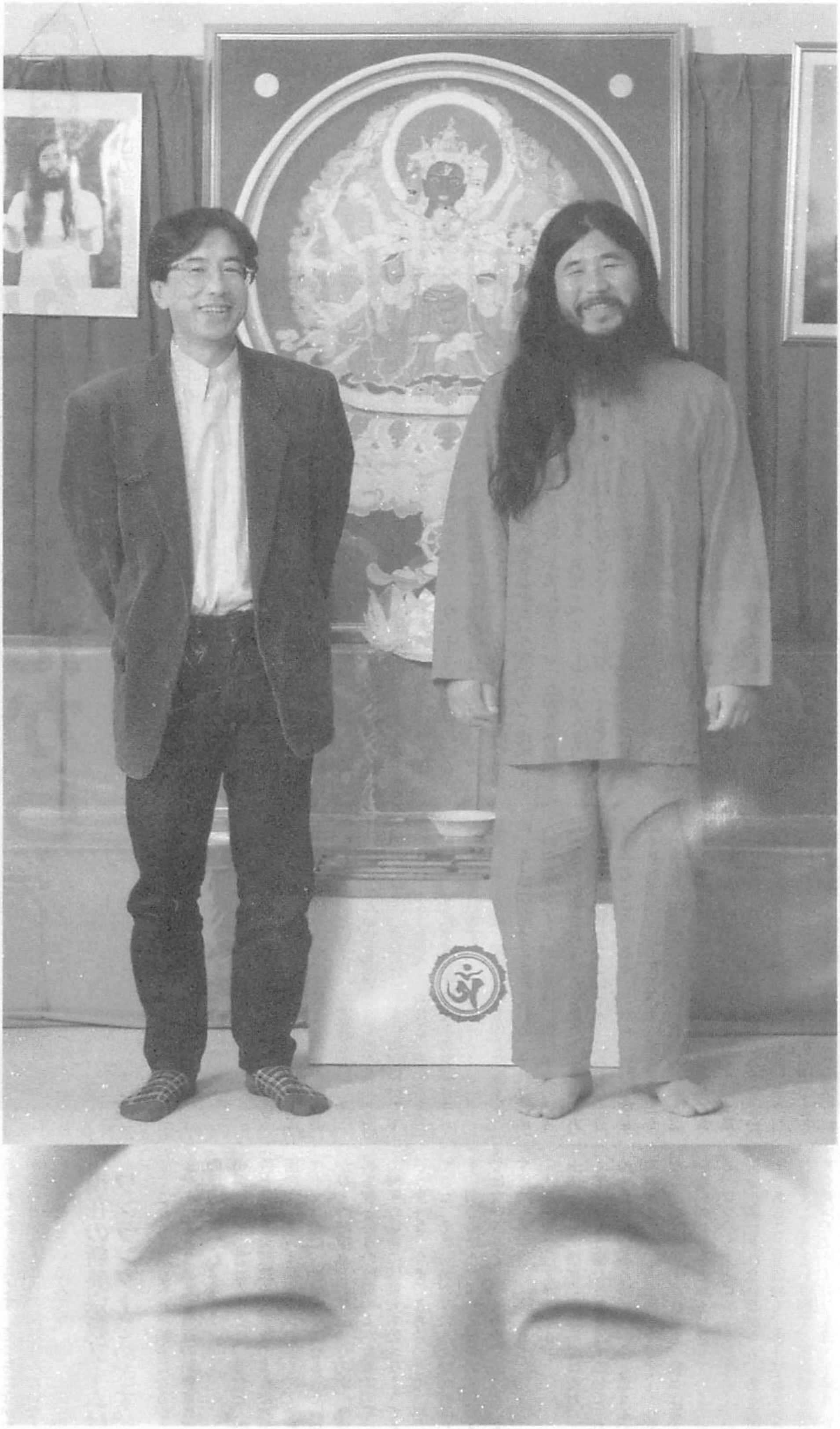
力とは、そういう状態にある魂を、自由に解き放ち、進化させていくものだけを、指しているはずです。ところが、そうではなくて、この世の願望をかなえるために、呪術的な目的で「念」を使うと、それも確かに、ひとつの超能力には違いありませんが、結局は、カルマを積んでしまうことになります。布教なんかを行う場合には、念を使って、願望をかなえてあげたりすれば、布教はしやすくなるし、入信者も増えるでしょう。しかし、それによって、アストラル体は、乱れてしまいます。ですから、この後者の魂を堕落させる超能力は、否定すべきものである、と考えています。もちろん、現在の日本にある宗教の多くが、真実の神秘力ではなく、魂を堕落させる超能力を利用しているというのは、事実です。でも、今は大変なスピードでセレクトが進んでいる状態なのだと、思います。智慧のある人、知性の高い人ならば、いつかは魂を自由にする神秘力のほうが正しい、ということに気がつくでしょうし、もともとサキャ神賢に縁なき衆生は、相変わらず後者の超能力のほうに、引かれつづけるでしょう。魂の流れにはふたつあって、落下するか、上昇するか、それは致し方のないことなのです。聖書にも、天国に至る門は狭く、悪霊に支配される門は広い、と説かれていますでしょう。

中沢　霊界の問題については、どうでしょうか。

麻原　霊界の問題には、発信する側とそれをキャッチする側のふたつの側面があって、今の日本では、それが混同されているように見られるのです。鬼神や悪霊や生霊や地獄や餓鬼のような存在は、霊の世界での実在であることは間違いありません。それはブラフマンのような、神霊世界での高い霊的存在と同じ意味で、存在しています。ところが、不幸の原因が霊にある、というのは、正しい宗教のあり方としては、逃げにすぎない、と私は考えるのです。悪い霊がいくら発信を行っても、人間の側がそれをキャッチしないで済むような、高い魂を鍛えていれば、そんなものは、関係がありません。宗教は、そのことを説くべきなのではありませんか。霊が不幸を招いているというだけでは、高い宗教とはいえません。オウム真理教では、そういう霊の世界が存在するにせよ、そういうことは魂の修行にとっては、どうでもいいことで、そんなことを気にしているよりも、煩悩を捨断して、キャッチしないようにするにはどうしたらいいのかということに重きをおいて、指導しています。

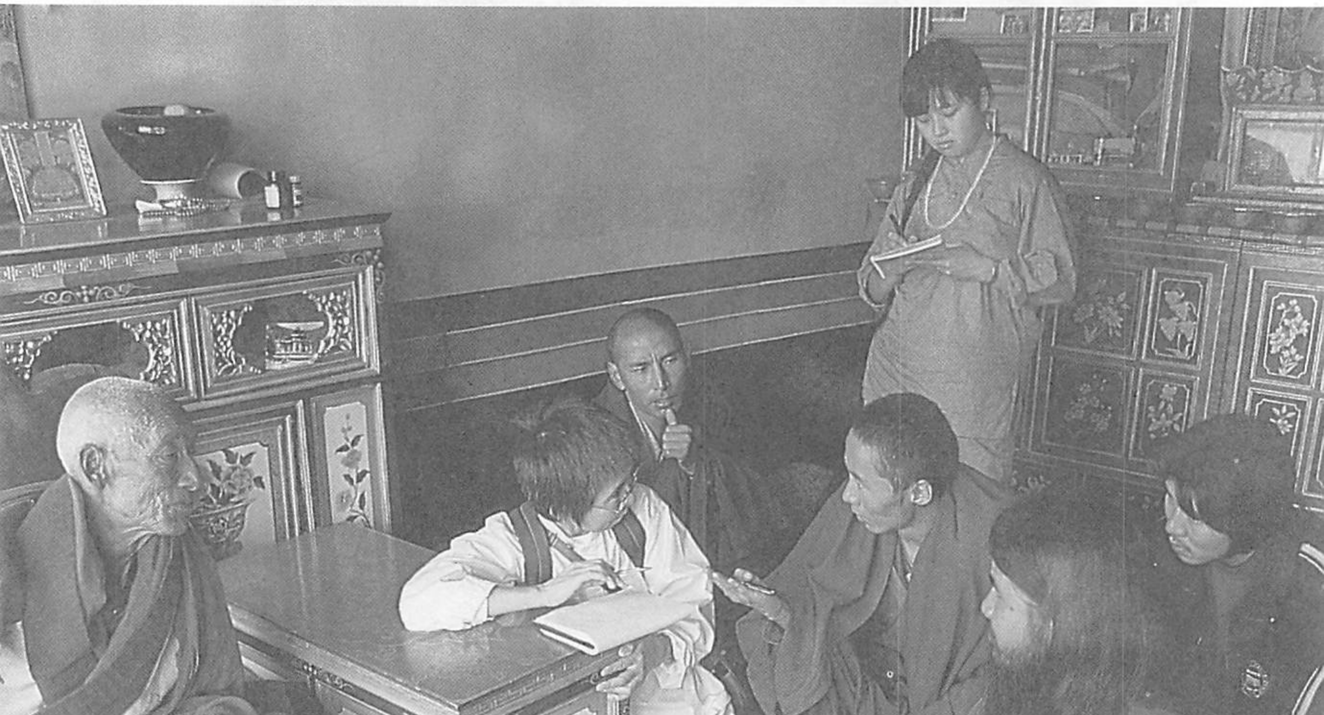
中沢　僕は宗教学を学んできましたから、どんな宗教が大きく成長することができ、どんなものが、いっとき流行して、あっさり消えていくのか、だいたい見分けがつくようになっています。宗教も生物の場合に似て、確かなものに根を下ろしていれば、たとえ初めのうちは危なっかしくとも、長い時間をかければ、大きく成長していくことができ、その反対に、いろいろの宗教のおいしいところだけを取り集めて、魅力的なものを作り上げたとしても、根が確かなものにたどり着いていない場合には、そういうスノッブな宗教は、そのうちしぼんでいってしまいます。どんな宗教も初めは新興宗教ですが、成長できるものと、そうでないものとの間には、初めから違いがあって、これは伝統的なものとどう絆を作れるか、ということにも関わっているように思えるのです。

麻原　そうだと思います。なにごともコツコツと、職人のような心構えで、正確にやっていく努力だけが、それを可能にしてくれる、と私も考えています。例えば、修行の過程でいろいろな体験をしますが、私たちはその体験のひとつひとつが、いったい魂の行うべき体験の、どこに当たるのかということについて、正確な位置づけを与えてあげることができなければなりません。ある体験が得られたとしても、まだその先があるのだということを示すことができなければなりません。それ



をコツコツとやりつづけることが、結果的には、すべての魂をニルヴァーナに導いていく早道なのだと思いますし、成長していくシステムの条件なのだと思います。その意味でも、繰り返すようですが、オウム真理教の初期の段階では、粗っぽさが目立つな、と今では反省しているのですよ。

中沢　麻原さんから、そんな殊勝な言葉を聞こうとは、思ってもみませんでした。（笑）



1991年８月　チベットにて　　中国政府によって突きつけられた厳しい条件の下での大昭寺僧院長ロサン・プンソム師との会見

麻原彰晃 VS. 荒俣宏

サイキック対談　人はなぜ現世を超えるのか

小暮 徹＝写真　　企画協力＝刈部謙一

荒俣宏氏
1947年生まれ。
慶應大学法学部卒業。
作家・博物学者。
著書に『世界神秘学事典』他。

荒俣　20世紀のキーワードから、話を始めましょうか。ひとつは〈チベット〉なんですね。チベットの死者の書とか、〈第三の眼〉といわれる千里眼、そして運命の車[*6]やダライ・ラマのことが注目を集めた。こうした東洋の修行をともなう出家的宗教とその超能力や超覚醒に、20世紀を救済する力があると信じられたからです。日本でも今はそうなりましたが、ヨーロッパでもアメリカでも同様です。期せずして、チベット、インド系のクンダリニー[*7]ですとか、チャクラ[*8]、あるいは阿含など原始仏教に関心が向いたんです。この中にある行のシステムが、非常に大きな問題になっていて、こういう方向での改造といいますか、精神改造をしようという流れが、大体20世紀をおおってきたわけです。

　麻原さんは、そうした流れの中に、乗っているというふうに私は拝見しています。まず、麻原さんのチベット的な教義との出会いと御自身が解脱を行なうまでのプロセスをお聞きしたいと思っています。

麻原　まず、私がはっきり記憶しているのは、3歳ぐらいのときだと思うんですが、体から抜け出して——ちょうど幽体ですね。家の周りを飛び回るとか、そういう経験がありました。それが6歳ぐらいまで続き、学校に行き出して、教育というものを受け出して、シャットアウトされてしまいました。中学、高校と柔道をやっていましたが、疲れた後で同じような現象が起きるわけです。でも、あまりまじめな学生じゃなかったものですから、体験そのものに、恐怖を覚えたわけです。

　20歳過ぎに東京に出てきたころから、本格的にそういう傾向のモノと接し始めたんです。

　まず、中村元[*9]先生の『原始仏典』を読みまして、あそこに書かれている禅定のまねごとみたいなのをやっていましたね。で、本格的に仏典に興味を持ち出したのが、増谷文雄先生の『阿含経典』[*10]です。なかなかすばらしい教えであると感じました。

荒俣　麻原さんが興味をお持ちになったころは、阿含というのは、仏典の中ではまだそんなにネームバリューのなかったころですね。

麻原　はい。日本に伝わってきている大乗仏教系の教義には、昔からあまり興味がなかったんですね。

荒俣　そうですか。それは変わっていますよね。ふつう哲学とか教義の問題から入ると、大乗系のほうが複雑だし、宇宙的でおもしろいわけでしょう。近代人の仏教への関心の持ち方はそうですね。でも、麻原さんは仏教のポイントを、そういう学問体系でなく、行の教える直接的叡智からつかもうとされた。なぜですか。

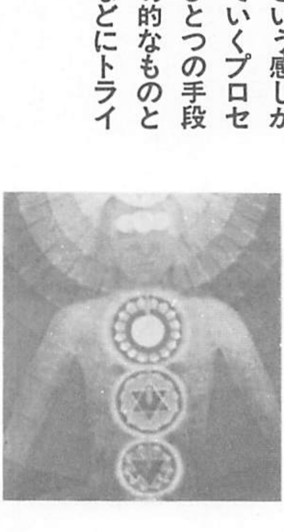
麻原　といいますのは、絵にかいたモチという感じがしまして、それよりもその世界に到達していくプロセスのほうに、興味がありました。それのひとつの手段として仙道的なものとか、あるいは、気功的なものとか、ヨーガ的なものとか、仏教的なものなどにトライしました。

＊6　**運命の車**
ジャガナート（Juggernaut）ヴィシュヌ神の第8化身であるクリシュナ神の像。この像を載せた車にひき殺されると極楽往生ができると信じた。

＊7　**クンダリニー**
ハタヨーガ、クンダリニーヨーガによれば、会陰あたりにあるムーラーダーラ・チャクラに宿る性力（シャクティ）のことで、シバ神妃のシャクティないしドゥルガーと同一視され、蛇の形をとってとぐろを巻いている。A



＊8　**チャクラ**
肉体から異次元へ移行するときの出入口。身体には7つのチャクラがある。



仏とは「覚醒者」の意味である

荒俣　なるほど。今、お話が出た修行ということに関しますと、密教というのが非常にこまかい方法論を持っているんですが、密教の、例えば空海のような人々の提案した行は、なさったことはあるんですか。

麻原　もちろんやっております。そういう書物を古本屋さんでいろいろ探しまして、いろいろやりました。ですが、ひとつ疑問があったのは、日本密教というのは、現世ご利益が中心なんですね。それで、現世で苦しんでいるのに、なぜ、現世ご利益を説くのかなという疑問がありました。しかし、日本には真の密教が不在だから、やらなければならないと、随分とやりました。

荒俣　たしかに、現世利益というのは、仏教が日本に入ってきた一番最初の理由みたいなところがありますからね。

　もちろん、現世利益の問題は、密教なら例えば、護摩法ですとか、あるいは、即身成仏の法とかいって、いろいろなものが組み込まれておりますけれども、その中から例えばヨーガ的な方向に感じいる行き方というのはありますよね。

麻原　そうですね。ただ、日本密教の成仏ということにずっと疑問がありまして、一体、成仏とは何だ。死んだ人はみんな成仏、みんな仏になるのかという疑問がありました。そこで、サンスクリット語を調べてみると、仏というのは、つまり、覚、目覚めるということだったんです。

荒俣　覚醒者。

麻原　要するに意識状態が、完全な状態、鮮明な状態、連続した状態であるということに気づきました。そこからパタンジャリ[*11]のヨーガの修行などの本格的なヨーガ的な修行に入っていったということです。

荒俣　いわゆるクリア・ライト[*12]ですね。そうすると、今のヨーガ的な修行というのは、やっぱり個人の問題というか、個人がまず解脱の意思を持たないことにはどうしようもないということが、大きいと思うんですね。ですが、一方日本では先ほど麻原さんがおっしゃったように、大乗的なものが大きい。悉皆成仏で、兜率天で弥勒[*13]が成仏を祈っていてくれれば、大丈夫だろうと。法華宗をはじめとして、大体そういう傾向が全部あって、日本人はそれをよしとして、それが大体国家仏教のようなものへとつながっていきますよね。仏教は個人ところか国家も法人もまもる、といったように。そういう傾向の成仏のあり方というのには、疑問を持たれていたということですね。

麻原　はい。疑問を持っていました。例えば、タントラ[*14]などの説いている法も、結局、小乗の上に成り立っている大乗なんですね。ところが、日本にはその小乗がない。

荒俣　日本の場合はそうですね。突然大乗になってい

＊9　**中村元**
なかむら・はじめ（1912〜）現代のインド哲学者。東京帝大卒。昭和29年東大教授。（中略）編著に『東洋人の思惟方法』『原始仏典』など。B



＊10　**阿含経典**
増谷文雄訳注、筑摩書房刊。全6巻。

＊11　**パタンジャリ**
ヨーガの代表的経典『ヨーガ・スートラ』の作者。因みに〝ヨーガ〟とは〝神との合一〟を意味する。

＊12　**クリア・ライト**
解脱直前の最も高いステージで現われる透明な光。

＊13　**弥勒**
サンスクリットのマイトレーヤMaitreyaの音訳とされているが〈弥勒〉という名前そのものはクシャーナ朝（1世紀半ば〜3世紀前半）の貨幣に現われる太陽神ミイロMiiroに由来すると思われる。



るから、行の積み上げがないですね、たしかに。
麻原　ですから、例えば、仏教のもともとの発生のねらいというんですか、個が肉体から離脱すること、そして、もともと私たちの持っている徳の原理によって、歓喜の状態、あるいは至福の状態があります。しかも、この世にいながら、私たちを構成しているもっと別のふたつの形状界——形状界と非形状界[*15]（無色界）とか言われているんですけれども——こういう世界と完全につながることによって、生死を超越するという教えがあるわけですね。

そこに到達しないことには、大乗の教えの崇高さも説けないと思うんです。

荒俣　そうしますと、麻原さんのお考えでは、日本人はいきなり大乗から入って、他力本願といいますか、これをひとつの生活のパターンに置こうとした。だけど、実は、大乗でさえ、個人的解脱の積み上げというものがないことには、宗教は単なる民俗習慣の製造元になるだけで、すこしも救済の方向へむかわないだろう、ということですね。

そのため、ヨーガというか行のほうにお入りになって、体験を積まれたわけですけれども、そのプロセスで、麻原さんにとって、これが普通の人間にとっては一番重要なんだなというふうにお考えになった行は、特にどんなものだとお考えになりますか。

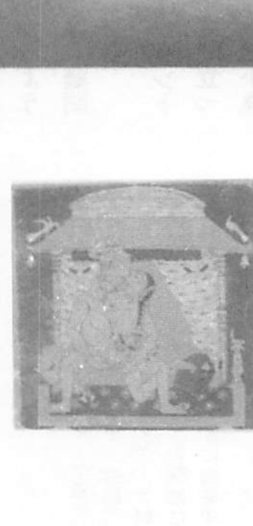
麻原　私は、ポア[*16]（転生）だと考えております。

そのポアといいますのは、例えば、ある方が亡くなられたときに、大乗の思想ではもともとその前に帰依という母体があって、その帰依という母体をもとに、ついているお坊さん、その人が、ほんとうにこの世だけではなく、あの世に精通していれば、そこで意識を移しかえられるということなんです。それだったら、もちろん、今まで大乗で言われていたように、成仏ということはあり得ると。それをなし遂げることが、愛であると。

そのために、仏道修行者は修行するんだということが最も大切なことなのです。僧とそれから信徒のつながりがしっかりしていて、ついてきている信徒に対して、しっかりと高い世界へ引き上げてあげるということが必要なんですね。



＊14　タントラ
インド中世の、女性原理、〈性力〉を教義の中心とする諸宗派の聖典の総称。A



＊15　形状界と非形状界
形状界とは欲望の世界の上に存在している絶妙な美しさの形状の世界。非形状界とは形状界の上に属する、形のない色と光の世界を指す。

＊16　ポア
仏道修行の成就者が縁ある衆生を三悪趣などの低い世界から人間や神などの高い世界へ意識を移し変える秘法で強力な精神集中と特別な観想で行なう。

仏教の流れに逆らった代償

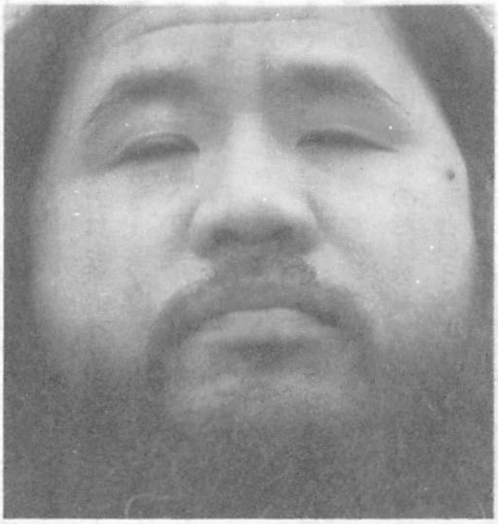
荒俣　いまのお話で、成仏させるのは僧侶の最大責務だという点が、僕には大変おもしろかったんですけれども、いまのお話だと、もうちょっと段階的なプロセスがあると思うんですけれども。

麻原　要するに、人間を形成しているものは、5つの罪悪――肉体、感覚、イメージ、意志そして意識と。この5つの中の意識が私たちの乗り物なわけですね。乗り物というのは、この世でも存在しているし、あの世でも存在している。その意識のデータによっては、例えば動物の世界に転生したり、あるいは地獄に転生したり、あるいは、餓鬼の世界に転生したり、あるいは人間に転生したりするわけですけれども、その意識が例えばお坊さんとつながっていますよね。そのお坊さんが意識のデータを入れ替えてくれる。入れ替えてくれることによって、人間界、あるいは上位[*17]の世界へと生まれかわるんだと。それを成せる人を、仏教では成就者と言っているわけですね。そういう人たちにたいする信仰によって、他力本願が成立するんです。

荒俣　それは非常に重要なことですね。お坊さんはポアを体験させる先生でなきゃいけない。でも、どうもいまの檀家制度下では、そういう点の修行をする坊さんはいそうもありませんよね。墓だけ管理しても、もうかるから。

麻原　大乗仏教で説かれている内容というのは、世界があって、そこへ引き上げていただくために仏様に帰依をするわけです。ナマ――帰依ですね。これは、例えば阿弥陀仏に帰依しますよとか、あるいは、妙法蓮華経に頼りますよという言葉を唱えることだと思うわけです。問題は、受け手が、つまり僧のほうがよほどしっかりと修行をしていないと、道だけ示されていて、実際は結果を出してあげることができないということになりがちなわけです。そこが最も重要なことだと思います。

荒俣　そんな中で、麻原さんなんかが、出家主義のようなものを唱えて、師と弟子が直結したシステムをつくろうと思ったら、これはどう考えても、日本の社会の中ではいろいろな面でぶつかりますよね。大乗はあ



＊17　上位
人間界より高い、阿修羅界、天界、それ以上の世界を指す。

る意味で、宗教生活をパートタイム化することの歴史だったわけですから。これをまたフルタイム・ワークにもどせ、と麻原さんは言うわけでしょう？　仏教の中だけでももしかしたらぶつかってしまうということを感じますね。

麻原　そうですね。

しかも、その上に、経典、お経ですね。実はあのお経というのは、パーリ語[*18]がサンスクリット語になり、そして中国語になり、日本に伝わってきているわけですけれども。

荒俣　漢訳の形できているわけですね。

麻原　はい。日本人はその漢訳を一生懸命読んでいるわけです。で、難しいからありがたいと。ところが、実際お経というのは、私たちの生き方を指定するための教えなんですね。ですから、ほんとうは日本語でなきゃならない。

荒俣　中を読んでみると対話形式とかそういうのが多いですよね。

麻原　そうですね。なんで、漢訳で読まなきゃならないのか。もしあれを日本語でしっかり読めば、安心して、仏法僧に対する信仰が出て、高い世界に生まれかわろうと思うわけですね。それをわざわざ漢訳で読んで、自分もわからない、相手もわからないというような状態でやってらっしゃる。

ですから、オウム真理教の存在が仏教界における批判の意味というのは、今の仏教の流れと全く逆のことをやっているんです。つまり、平易な教えに変えてしまっているとか、あるいは、基礎資料にしてしまったとか、ほんとうにそれはお釈迦様がお説きになった原則なんですけれども。

そういう意味では、叩かれても仕方がないかなと思っているんです。

経典を現代的に言いかえよ

荒俣　なるほど。その話はおもしろいですね。実は、結局、西洋で宗教改革というのが行なわれましたよね。で、プロテスタントという新派ができてくるわけですけれども、原因のひとつは、いま麻原さんがおっしゃったことと非常に関連していて、昔は聖書はラテン語で書いてあったんですけれども、ラテン語はだれも読めないじゃないか――こんなものをいくら読んでも内容がわからない。呪文じゃないんだから。呪文だったらたしかに音の力や、あるいは、マントラというそこに込められるエネルギーの力でなんとかなるかもしれないけれども、少なくとも、これは経典である。内容を理解しない以上は、人々に対して、何の力も与えられないんじゃないか――ということで始まったのが、ルター以降の宗教改革でしょう。それまで、ドイツ語に訳したらいけないというのがあって、それでもあえて訳したところから、新しいキリスト教ができてきたのと同じことですよね。

＊18　パーリ語
小乗仏教経典の言語として多量の文献をもち、中期インド・アーリヤ語、プラークリット語を代表する言語。A

麻原　そうですね。
荒俣　そのこと自体が結局、物事を知るという人間の特性の発露になっている。それで宗教の教えというのもとりあえずまず対話形式、あるいは問答ということがベースになるということを考えると、実際にその人々がわかるように話すということは、とても重要な要件ですよね。で、法華経自身がそう言っているわけですからね。そのためには方便も必要であるということまでね。
麻原　そうですね。おっしゃるとおり、お釈迦様も「なぜパーリ語で説くんだ、サンスクリット語で説かないんだ」という人に対しては、「それは簡単なんです、パーリ語はやさしいから」ということなんです。
　それで、ひとつ問題なのは、経典が日本語に平易に訳されてしまって、まず、お坊さんのありがたみがなくなる。次に、お坊さんの意味が規定されてくる。どういうことであったということが。そうなった場合、いまのお坊さんがお坊さんでなくなっちゃうということがあるんじゃないかと私は思いますね。
荒俣　なるほど、ならばズバリ聞いちゃいますけど、麻原さんはあくまで仏教の教えを実践する人であって、麻原流の教説を創作したわけじゃないんですね。
麻原　ええ。解脱についても仏教の考え方と一致しています。ありのままに物を見ることが、苦しみからの解放だと私は考えるんです。
荒俣　なるほど。
麻原　それは、どういうことかというと、例えば、ある煩悩が生起する。その場合、なぜその煩悩が起き上がったのか。その煩悩は、幸福を与えてくれるのか、不幸を与えてくれるのか。例えば、そういうことをしっかりと見きわめるために、お釈迦様をはじめとする無心の聖者の方が、多くの経典を残していらっしゃるんですね。ですから、私としては、その経典の読み合わせだけで十分であると。それを逆に現代的に言いかえるだけで十分であると考えているわけです。ですから、そういうすばらしい経典を、今の日本の方に多く、わかりやすく広めていくことが、私の役割ではないかなと思うわけですね。
荒俣　つまり、麻原さんのおやりになってることはごく平明で基本的なことで、エキセントリックでも何でもない、というわけですね。一般の人もできるような。
麻原　だから難しい言葉を読める人イコール価値の高い人イコール評価が得られるというか、そういうシステムができ上がっているみたいですね。

国が強く敵対する理由

荒俣　そうですね。本末転倒ですね。というのは日本——これは中国でもおそらく同じだと思うんですが、仏教を学ぶ拠点としての修行場やお寺というのは、いまの感覚で言うと、総合的な道場であり、なおかつ大学や研究所なんですね。そこで得られた成果が、平易

な言葉で説かれて、まだそういうところに達していない人々にサービスされる。そういうことを、別に禁止しているところではないわけですよね。けれどもいまは、仏教も家元制度みたいなものになってしまって、そこのところがとても制度的になっている問題だと思うんです。

麻原さんのやっているようなことをした人は、明治期以降、たしかに何人かいたと思うんですけれども、ある意味ではみんな挫折しているんですね。結局、制度化でなくミッションに走ると、仏教――神道もそうなんですけれども――必ず新派、新規宗教だということになって、体制から締め出される傾向にありますよね。

そういうことを教えれば、我々自身もひとりひとり自分で理解できるから、言ってみれば、どこにも行かなくても自分の生活の中で、悟りに達することができるかもしれない。そういう自分自身の機会が広がる可能性を与えてくれるわけですよね。でも個人がそういう行に入ると、教団としては困る。制度の力を保持できない。結局、体制の中では、つぶすということになる。そうしないと、世の中のシステムが回転していかない。宗教って、本質からして反社会的なんです。とくに個人が個人だけの解脱を求めるときには。

麻原　そうですね。確かに、おっしゃるとおり、お釈迦様が登場なさった時代でも、在家の方、つまり家にいらっしゃって悟りを開かれた方はたくさんいらっしゃいますし、その教えが浸透すればするほど、利益追求型の日本人から、平安を求める日本人に変わっていくでしょうから、日本の機構にとっては最大の恐怖となる考え方じゃないでしょうかね。

荒俣　まさにそうですね、それは。

麻原　というのは、利益を追求させることによって国は潤っているわけですから、そこでそういうのが止まってしまう。確かに、個々はそれで幸福になりますが、



国としてはそこから利ざやを稼げなくなるということで、そういう意味でオウム真理教への敵対の強さというのはあるんじゃないかと思いますね。

経験してほしい意識状態とは

荒俣　それでひとつ、オウム真理教では、そういう現実といいますか、現世――我々が実際この世の中で生きていくための方針といいますか。真理を追究すれば、当然、あるときには社会のシステムとバッティングする。それをどういう方向でアジャストするのか、あるいは、完全に切り捨てようというお考えなのか。そこの方法論を伺いたいと思いますね。

麻原　脱社会の構造を考えているわけじゃなくて、修行者が解脱に到達するまでは離社会でしょうがないんじゃないか。到達したら、その功徳を還元する。というのは、仏教の教えを実践して、到達した人たちは、この社会の福田[*19]だと思うんです。そのような考え方をもとにオウム真理教は動いているというふうにお考えいただいたらわかりやすいと思いますね。

荒俣　その点に関していうと、今の世俗社会が子供や市民に行なってる教育と、麻原さんが弟子たちに対して行なっている教育とでは、もう本質的にちがうわけでしょう。目的は幸福の追求のための能力を与えることだとしても、その能力の中身がまるでちがう。

麻原　社会教育で得られるものは知識だと思うんですね。ところが、オウム真理教が弟子の方に、あるいは信徒の方に提供するのは智慧である。この知識と智慧のちがいは何かといいますと要するに、深い意識状態に到達して得させるものイコール智慧で、表層の状態でデータとして記憶したものが知識という定義ができると思うんですね。深い意識状態に到達させる技術というか、テクニックを伝授して、一定期間を選んでやる。ところが、智慧を全体に提供できるかというと、



それは難しいと思いますね。そこで、社会教育と出家的教育の二分化が起きて当然だし、二分化が起きたほうが、いい社会ができるんじゃないかと思いますね。

荒俣　我々が興味深いと思うのは、深い意識状態でのお話なんですけれども、我々自身が意識の問題で境界を越えるということには、いろんな意味があったり、あるいはいろんな困難があったりすると思うんです。意識の境界を越えたり、生死の境界をも越えたりというようなことが、「越える」という意味ですね。我々がなぜそういうものを越えなきゃいけないのか。

普通の人は、我々も半分はそうなんですけれども、「悪い状態にいてもいいじゃないか、楽しく暮らしていれば、ないしは悪が世の中にはびこっていても、悪にもはびこる権利が多分あるんだろう。それに飲み込まれるのも我々の勝手じゃ」というふうに言って、開き直る人って多いと思うんですね。そういう人々に、「いや、そうじゃない、とりあえずそういうものを超越したり、あるいは解脱したりすることが非常に重要なんだ」ということを説明しなきゃいけないと思うんですけれども、そういう点については、いつもどういうお話をなさっているんですか。

麻原　要するに、すべてを知ってから判断しようじゃないか。例えば、悪がはびこる。それを肯定するのもよし、否定するのもよし、あるいは善に対しても、それも実行するも、しないもよし。大切なことは、まずすべてを知ることである。知るためには、結局、目覚めた状態――例えば眠りに入る状況、あるいは生から死に至るとき――この中間状態というのは意識の断層があるわけですね。一種の気絶状態。そこを通って意識をチェンジするわけですけど、それを超える技術がある以上、それを経験すべきである。経験した後に、それを否定したければすればいいじゃないか、肯定したければすればいいじゃないか。

実際、世界の構造、あるいは意識の構造ということでは、全部で4つの断層[*20]があるんですね。5段階の階層があるわけですけど、そういう断層を経験してくると、今、自分の考えていることというのは、本当に完全な視野狭窄の世界観でしかないんだと。

修行によって、それがふたつになり、3つになり、4つになるわけですね。ですから、聖徳太子が一度に多くの人の話を聞けたというのは、完全に意識が分化しているわけです。

荒俣　よく言われますね。聖徳太子の夢殿は、最初の独房行(ぎょう)の場でもあったわけでしょうね。

麻原　そういう意識の分化が可能になってくるんですね。仏教は、全く難しい教えじゃない。だれでも当たり前に教えを実践していけば得られる状態です。私はぜひとも皆さんに、そういう意識状態を経験してほしいなと思います。

阿蘇は地の霊力が強い

＊19　福田（ふくでん）
人々が田から米を収穫し、生命を維持するのと同じように、真理の実践という人を真に幸福にしてくれる集団から真理を学び吸収し、それによって幸福になること。

＊20　4つの断層と5段階の階層
低位形状界、低位非形状界、高位形状界、中位非形状界、完全煩悩破壊界の5階層と、その各階層の間にある4つの断層を指す。

荒俣　そうすると、修行の立地条件も重要になってきますね。熊本ですとか、あるいはこういう富士に道場をつくられて、今、カリキュラムで人々を修行、導いていらっしゃるわけですが、これはやはり選ばれて、こういう土地がいいからというお考えのうえでやっていらっしゃるんですか。

麻原　まさにそれはそのとおりです。要するに、高地である。高地であるということは調気法[*21]――つまり空気の出入りをコントロールする技術があるわけですけど――そのときに空気が薄いことで肺に負担がかかるわけですね。そういう意味で、例えばヒマラヤの土地とか、わかるわけですけど、あの辺ぐらいの高さがちょうどいいので富士が選ばれたということがまずあります。

荒俣　そういえば、昔からこの富士というのは日本の行のひとつの中心地ですね。それはそれなりにちゃんと意味があって、富士山というシンボリックな存在があるということよりも、むしろ立地条件的に行に恵まれているというふうに解釈したほうがいいわけですね。

麻原　そうです。というのは、阿蘇につきましては、それに加えて火山帯でありますから、熱エネルギーが強い、地の霊力が強いということがあります。

　もうひとつ、人里離れているところを修行場にするのは、古来からの鉄則です。

荒俣　なるほど。いたずらに地域ともめるために入ったのではないわけですよね。もうひとつ、胎内、あるいは地下についてはいかがですか、修行の場としては。

麻原　地下というのは土地の下。

荒俣　土地の下ないしは密閉された真っ暗な空間。よく新聞報道なんかで、そういう部屋があるという話も伺っていますが……。

麻原　リトリートのことですね。それは瞑想修行者にとってはベスト・コンディションの空間であるということですね。といいますのは、修行者の意識が自己の内側に入る場合、まず感覚はシャットアウトして心の中に入っていく。ですから、外界の空間と完全に遮断された、しかも真っ暗闇の空間が最適なわけです。私もこの修行をよく行ないますが、この暗闇のおかげで自己の内側の光が自分自身を照らし出してくれるんです。もちろん、これは解脱には不可欠なんですよ。そして、死後のバルドー[*22]の体験も起きやすくなりますしね。ただ、いまはちょっとある意味での怨念といいますか――社会的に、このリトリート修行が問題化していますので、ひかえてはおりますが。

性的交わりで現世を超える？

荒俣　またキーワードにぶつかりましたよ。〈内光〉。内部の光を体験するという実感は、境界を越えるということのひとつのシンボルだと思うんです。その体験のプロセスというのをもうすこし伺えたらありがたいのですが。

*21　調気法
宇宙エネルギーを空気と一緒に取り入れ小宇宙である人体に還元する修行法。

*22　バルドー
中間状態を意味し、カルマの因が5つの階層に瞬時に現われる状態。

麻原　まず、普通の瞑想をする。普通の瞑想をすると、イリュージョンが始まるわけです。幻影が始まってくるわけですね。この幻影とは内側の光じゃなくて、外側の光の幻影です。それが今度、過ぎ去っていきますと……。

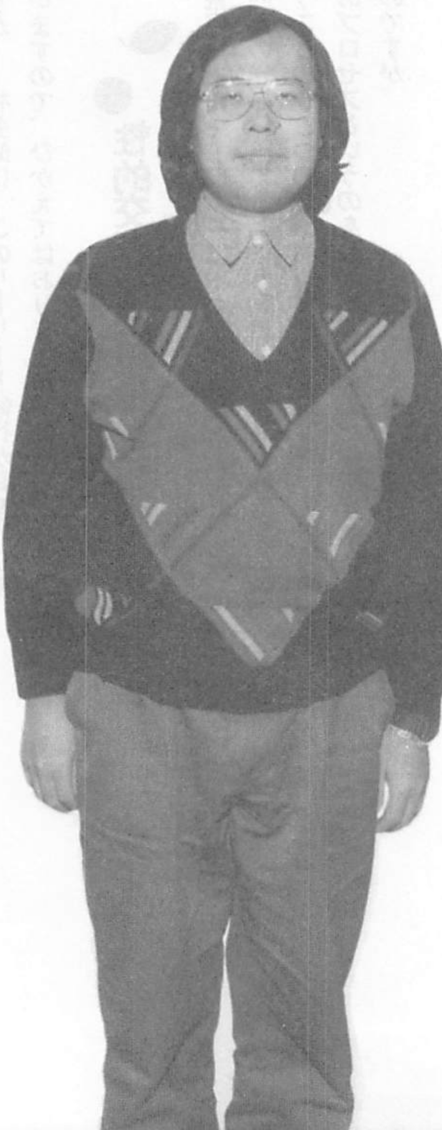
荒俣　それはどのぐらいの時間で出てきますか。

麻原　これは修行のステージによって違いますし、私たちなんかは出ませんけども、やはりそれぞれの修行を一生懸命なさって、1カ月ぐらいのものでしょうね。それが出だしたその次の状態で、闇夜というのがあります。闇とはどういうことかというと、そういうイリュージョンがどんどん強くなってくる。光が強くなるんですね。その後に、黒い空間が現われます。黒い空間で普通は気絶します。何度か気絶を経験しているうちに、それを乗り越えられるようになります。その次に起きる状態が内側からの光ですね。この内側の光というのは仏典にもあります。

荒俣　大変よくわかります。「結局、そういう意識がある以上は、いろんな形で1回体験をしてみたらいいじゃないか。そうすれば、世界の見方も一気に変わるし、我々のいまの意識の中で、これでいいわいと威張っていることはないんじゃないか」というお話はとてもよくわかりますね。

そこでもう1回、伺っておきたいのは、結局、ほとんどの人々は、昔もいまもそうだと思うんですけれども、普通、意識を持って生活している段階では、大体ひとつの意識ないしは病気になったり、あるいは高熱が発せられたり、眠っているときに、確かにひとつかふたつぐらいを垣間見るかもしれませんけれども、大体ひとつですね。このひとつの中で死んじゃった場合に、それだけしか知らないで死んじゃった場合に、我々自身が死ぬときに悔しいなと思う、そういうときがあるんでしょうね。でも、全くひとつの意識の中で生きてきたことが、無意味ではかばかしかったのかなとは思いたくないですね、普通の人は。我々自身がもし万が一、ひとつの意識の中で暮らしちゃったときに、ほかの意識を体験するようなチャンスは、なかったんでしょうか？　それとも気がつかなかっただけなんでしょうか。

麻原　まず、先ほどおっしゃった夢がありますね。それから、もうひとつは、もちろん瞑想がありますね。



そして、性的な交わりのときも、同じように中間状態を経験できると言われていますね。
荒俣　なるほど。夢や瞑想やセックスは、日常でもぶつかることがある。
麻原　現世で経験できることといったら、この3つほどじゃないでしょうか。
荒俣　それはとても重要なことですね。3つ目にご指摘になった性的な交わりなぞはとくに、普通の人間で現世の悪に染まったとしても、ある段階で確実に純粋になったり、違うフェイズを垣間見るようなチャンスになるわけですね。そうしますと、ある意味では自分自身の中でそういう芽を探し出せさえすれば、実は我々自身、越境している部分も現世で結構持っていることになりますね。
ところで、どういうようなことで麻原さんのお弟子さんになる方が多いんでしょうか。
麻原　ふたつのタイプがあると思います。ひとつは、前世からの修行者ですね。この方々は大変優秀で——優秀というのは学歴がどうこうとか、そういうことじゃなくて、例えば意志の力が強いとか、集中力があるとか、そういう特性があります。こうなられる方は、現実の生活にもともと飽きている方ですね。
もうひとつのタイプは現世逃避型です。この方々がよく問題を起こしているんですけれども、要するに現世で挫折を味わった。それによって逃げ場を探す。そこに教えがあったので、甘えてしまうというタイプですね。このふたつのタイプがあると思いますね。
ただ、前者であろうと後者であろうと、例えばお釈迦様の弟子でも、たくさんの盗賊がいたことでもわかるとおり、きっかけはどうでもいい。要するに、自分を省みるチャンスがある人というのはすばらしい人じ



やないでしょうか。

超能力は解脱の裏にある

荒俣　最後に、そういう解脱をすることによって、我々自身が現世で使える超能力の問題についてお聞きしたいのですが。超能力というのはなかなか難しい問題で、その場でやってみろと言われれば、なかなかできるものでもないし、現にあるものとないものとの区切りも明快にはつかない問題だと思うんです。この超能力については、麻原さんは実際に身につけられたと聞いていますが……。

麻原　それはなぜ起きるのかというと、仏教の教えの中に証知*23、捨断*24、現証*25、それと修習*26というのがあります。証知というのは、要するに自分の構成しているテーマを正しく知ることであって、捨断というのはそれをシャットアウトして、そして非神秘的なものをシャットアウトする。それともうひとつは渇愛*27ですね、煩悩をシャットアウトする。それによって生じるのが神秘力と離解脱*28ですね。ですから、離解脱というものの裏側にもし神秘力がなければ、それは離解脱ではない。これが私たちの定義です。

荒俣　それはほんとうによくわかる。超能力という言い方はとても嫌なんです、僕も。何かうさん臭いし、そういうのじゃなくて、神秘力というお話でしたから、そっちのほうが僕はずっといいと思いますね。

我々はエアコンとかのおかげで一定の温度の中でしか、仕事をしないようにしている。その環境というのは簡単に言っちゃうと、知識とか技能を一番最高度に発揮できる環境なんですね。ということは、逆に言うと、それ以外の力は、そういう中では出しようがないという環境なんです。そんな環境に我々は３００年ぐらい住んできちゃったわけですね、近代合理主義の中で。そうなると、我々自身もよく感じるんですけれども、ジェットコースターで逆さまになったり、あるいは39度ぐらいの熱が出たときにうわ言を言ったり、幻覚を見るというのは、まさに我々が今までつくってきた自分の知識や能力を発揮する環境の奪回なんだ、ともいえますね。異常環境に置かれちゃったときには、意外にいろんな力が出て当然なんですね。これもさっきの麻原さんのお話と同じなんですけれども、現世で体験できる要素というのは結構あるんですね。超能力は、おそらくその延長だろうというふうに理解したほうがよろしいんじゃないかなと、僕は考えているんです。

麻原　その神秘力ですね。神秘力をわかりやすく言うならば、例えば犬はしゃべることができない。人間はしゃべれる。これは、犬にとって人間がしゃべれるということは犬にとっての神秘力ということだと思うんですね。ですから、その延長上にあるとお考えになって結構だと思います。

荒俣　結論が出ましたね。ありがとうございました。☒

＊23　証知
自分自身の煩悩の汚れを、身の行為、言葉、心の働きによって証し知ること。

＊24　捨断
身の行為、言葉、心の働きの汚れを自己の本質と見ないで捨て、断つこと。

＊25　現証
時間、空間が過去の行為からくる結果の制約を受けなくなった時生じてくる神秘的な光、音、光線をこの現実の世界に証明し体現すること。

＊26　修習(しゅじゅう)
正確な修行法を習い、それを繰り返し実践することによって修めること。

＊27　渇愛
求めて得ても満足できない愛欲のことをいう。

＊28　離解脱
煩悩の要素から解放された状態のことをいう。

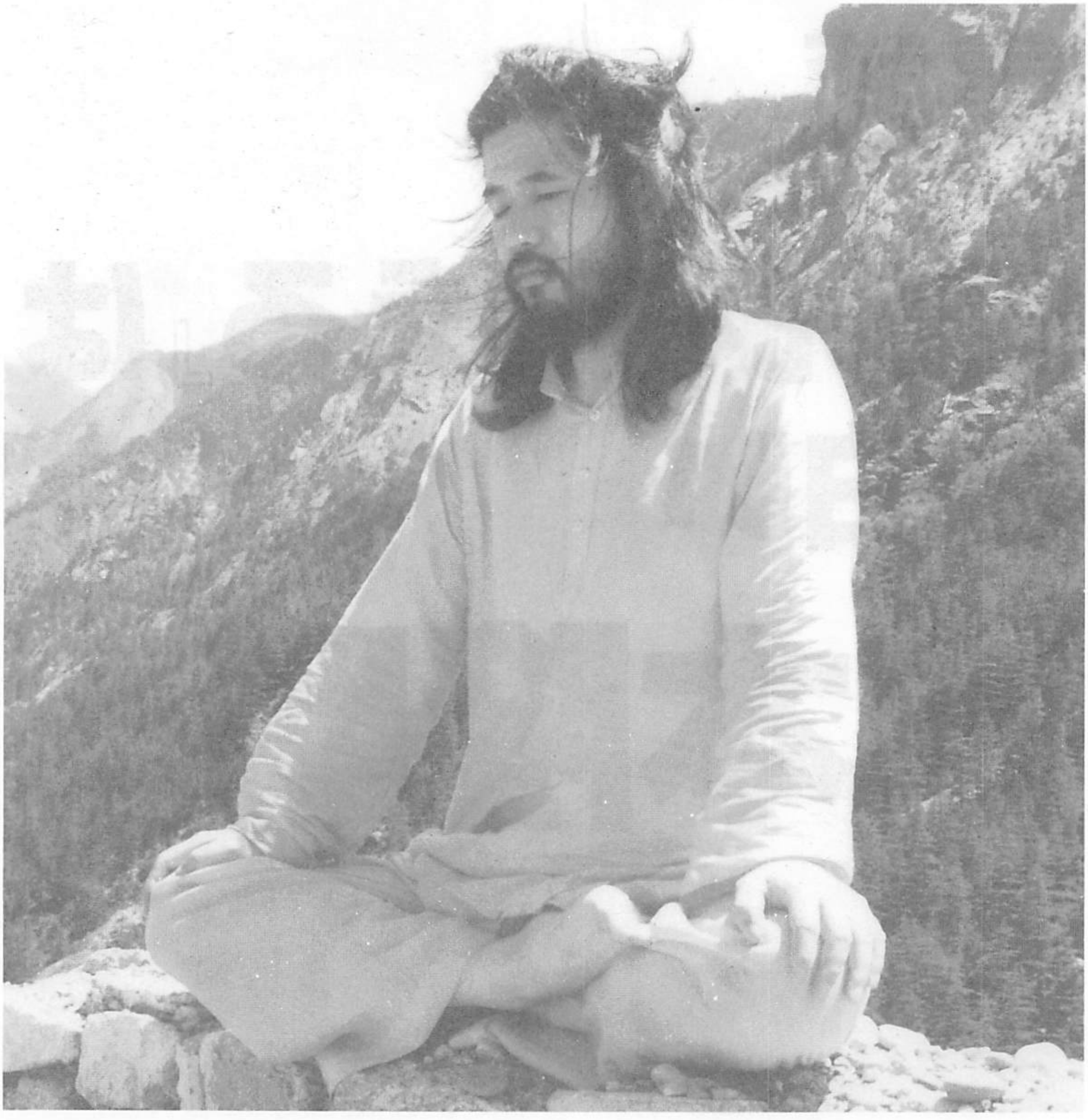
脚注のＡ：平凡社大百科事典、Ｂ：新潮日本人名辞典より　＊７、＊８、＊14図版平凡社刊　イメージの博物誌　より
＊13写真　弥勒菩薩半跏像　東京国立博物館蔵

書評

『生死を超える』は面白い

吉本隆明

吉本隆明氏
1924年、東京生まれ。
東京工業大学卒業。
評論家・詩人
著書に『言語にとって美とはなにか』、
『共同幻想論』、『高村光太郎』等。
作家吉本ばななさんの父親



真の解脱者が深い瞑想に入った瞬間、

呼吸は止まり、心臓さえも完全に停止する。

『生死を超える』は面白い

吉本隆明

たぶんオウム真理教に親しんでいる人か、オウム真理教の教祖麻原彰晃のファンの人だとおもう。麻原彰晃の著書を数冊だまって贈ってくれた未知の人があった。せっかくの無償の親切を無にしては相済まないとおもって、暇を見つけてはよみだして、とても面白い思いを体験した。とくに『生死を超える』という本はひどく興味をひかれた。そこをひと筆書いてみたい。

まず麻原彰晃が何を信仰とかんがえているかということだ。べつの言葉でいえば麻原彰晃を教祖とするオウム真理教がどんな宗教かということになる。はじめに人生のすべてを〈苦〉だと感じて、この〈苦〉から解脱したいという強い思いが生じるのが〈信仰〉だと述べられている。これはわたしたちが慣れ親しんできた仏教の各派が一様に根本の理念としているから、オウム真理教も仏教のなかに入ることになる。信仰がうまれると〈修行〉して人生の〈苦〉から解脱しようとかんがえるようになり、修行に入る。この修行の仕方は仏教の各派ですこしずつ違ってくる。麻原彰晃が採用しているオウム真理教の修行法は、ヨーガの方法だということがわかる。そしてここからがこの本のいちばん興味ぶかい記述になる。わたしはこれほど如実で微細なヨーガの解脱体験を書いた本を読んだことがなかったので、興味がつきず想像をめぐらすところがおおかった。そこを書いてみる。まず、第一に、著者が「熱のヨーガ」と呼んでいる

精神の集中法がある。これはスヴァディスターナ・チァクラ（下腹部にある霊的なエネルギーのセンター）に精神を集中することで、下腹部に強い熱が発生し、その熱が背骨を伝わって上がってゆく。すると背中全体が熱くなって、ひどい寒冷でも平気になり、また精力は絶倫になる。

第二に、つぎの段階はマニプーラ・チァクラ（へそのあたりにある霊的なエネルギーのセンター）に精神を集中する。著者麻原彰晃はこの段階で「死と転生のプロセス」を何回も体験したと述べて、一般に臨死体験と呼んでいるものを、微細に徹底的なところまで自分の体験として述べている。

わたしは以前に、瀕死の体験をして回復した人たちの手記をあつめてみたことがあった。また他の著者（たとえばロスのような）があつめた臨死から生還した体験の記録を読んだこともある。いまでもその種の臨死体験の記録は集められたり、論じられたり（たとえば立花隆のような）している。これらには共通の体験的なイメージが語られているが、どれも布きれ一枚を隔てたようなぼんやりしたあいまいさがつきまとう。この本で麻原彰晃が、ヨーガの第二段階マニプーラ・チァクラ（へその霊的なセンター）に精神を集中したとき体験した「死と転生のプロセス」の記述を読んで、流石に宗教者の修練らしく、いままで読みえた臨死体験の記述のなかでは、かつてのない鮮明な細部の体験イメージが描かれていて、感服した。もちろん麻原彰晃のばあいはヨーガの修練によって臨死のイメージの状態を産み出しているわけだ。

(1)死の直前になると感覚器官が働かなくなる。まず音がきこえなくなることからはじまって、嗅覚も味覚も触覚もつぎつぎ弱まってゆく。

生がまだあるうち身体を構成している要素（地・水・火・風の要素）が分解されて自性（じしょう）に還元される。肉体が地の要素に分解されると自分の体がぶよぶよになる感じになる。この過程では、黒と黄色のまざった色がみえる。

つぎに血液や体液が水の要素に分解される。鼻汁が出たり体がむくんだりする。



血液の流れも止まった感じになる。水に映る白い月の色のイメージがパッ、パッときらめく。
　つぎに体温が火の要素に分解されてゆく。下腹部から冷えてきて、その冷たさが背中を伝わって全身に広がっていく。自分の体が鉄になった感じになる。この過程では朱色がみえる。
　おわりに呼吸が風の要素に分解される。息苦しくなり、生命への執着がつのり、死ぬのが怖いと痛切に感じる。じぶんの魂が青緑色をみている。呼吸がせわしくなり、最後の息を吐き出して、死んでしまう。
(2)死んだあとにも、すこしの間魂が心臓のところにとまっている。天から真っ白な光がおりてくる。この光は魂に甘味を感じさせる。この光は父親の精液の象徴にあたる。つぎにへそのあたりから赤黒いエネルギーが上昇していく。これは母親の経血の象徴にあたる。白い光と赤黒いエネルギーはアナハタ・チァクラ（みぞおちのところの霊的センター）の内側に吸収されてゆく。著者の解釈ではこの過程では両親から受けついだ遺伝的な要素が分解されて自性に還元される過程にあたっている。
　もうひとつ誕生のときすでにもっていた前世からの要素がある。これが分解されなくてはならない。天から真黒い光でできた一本の道がおりてきて、やはりアナハタ・チァクラに吸収されてゆく。
(3)つぎは死後の世界へ魂が行く。最初にまぶしい透明光がさし込んでくる。そこにとび込めれば無色界に行くが、これは生前に修行をつんだものだけしか行けない。そこに生まれ変われば光の身体をもち、何千億年も生きられる。ここは仏教で法界と呼ばれるところだ。著者はしばしばそこに訪れることがあると述べている。この光は、半日か一日つづくがこの光にとび込めなかった魂には、つぎの光が射してくる。透明に近い白銀光でここにとび込めれば色界に生まれ変われる。仏教で報界と呼ばれているところだ。ここの食べ物は光、衣服も光でできている。やはり生前功徳をつんだ魂だけが行けるといっていい。
　この白銀光が消えると、美しい赤紫色の光がさしてくる。この世界は、変化身（魂身）の住む応界で、弥勒菩薩のいる兜率天がその世界の中心になっている。釈迦もここから現世におりてきた。チベットのダライ・ラマもそうだ。この本の著者（麻原彰晃）もそうだとじぶんで言っている。著者がヒマラヤ山中で修行をしているとき、挫けそうになるとパールヴァティー女神が応界から、赤紫色の光線に乗って励ましに来たと述べている。
「普通の人間」は応界にもいけないから、つぎの光を待って、光から具象的なイリュージョンの世界になり、魂はじぶんに合った世界へとび込んでいくことになる。死んでから四十九日目が最後の世界で、とび込んだあと、吸い込まれるように落下してゆく。たいていの場合、性交のヴイジョンがみえ、無意識にそこへとび込んでしまう。すると落ちてとまったところが子宮であったり、卵の中であったりする。だから四十九日後には新しい世界に転生していることになる。
　死後一日目から次元が落ちていって、人間界は四十三日目くらいまでだ。四十五日くらいになると動物界で、最後の四十九日は、地獄に生まれ変わることになる。
　さすがにヨーガのすぐれた修練者らしく、この本の著者麻原彰晃の臨死体験の記述は微

細で、徹底的で、如実で、しかも最後に魂が性交の場面にとび込んで転生する経路が内側から記述されていて貴重な興味ぶかいものになっている。もちろんこの臨死体験の記述には、わかちがたく著者の信仰する原始仏教の理念と世界観が混融している。だが著者があっさり触れただけのわたしたち「普通の人間」の臨死体験の記述が、もっと微細で具象的に内在化されていたら、もっと貴重だったろう。なぜなら、「普通の人間」に臨死体験が存在し得るとすれば「死ねば死にきり　自然は水際立っている」と思っているにもかかわらず、臨死体験のイメージが不可避的にやってくるにちがいないからだ。

　しかしながらヨーガ修行者としての麻原彰晃の臨死の記述は「普通の人間」にもなかなかに物珍しく貴重だ。そして興味ぶかい記述になっている。この本を読んでいるとヨーガの肉体的な修練が、なぜ仏教の世界観である生死を超える理念をつくるところにたどりつくかが、一個のヨーガ修熟者の記述を介して「普通の人間」にも実感的にわからせるところがある。この記述は貴重なものというべきだ。著者は「死と転生」のプロセスの修練の体験を通じて、つぎのような認識に達したと述べている。

①死後の世界の存在を確認できる。
②転生の秘密を知る。
③功徳（よいカルマ）と修行の必要性を理解する。
④功徳と修行以外が無力であることを知る。
⑤すると、この世のすべてが幻影だと感じるようになる。
⑥そのことから執着がなくなり、解脱への布石になる。

いまこういう条々を「普通の人間」の言葉で言い変えてみるとこうなる。

①死後の世界の存在のイメージがつくれる。
②転生のイメージを子宮にとび込むまでつなげられる。
③功徳（よいカルマ）と修行以外には、死後の世界のイメージをよくできる手だてがない。
④死後の世界の存在というイメージを放棄しないかぎり、功徳と修行以外に人間のすることは何もない。
⑤死後の世界の存在というイメージを確信するかぎり、現世は幻影と感ずるのは当然だといえる。
⑥死後の解脱に最高の価値を与えるかぎり、ほかのことに執着がなくなるのもまた当然だ。

　わたしたちはこの著者の「死と転生のプロセス」にたいする如実な体験と理念の記述から、世々の仏教の僧侶たちの修行や生死観が、大なり小なり著者の記述しているようなことだったのかと納得し「そうかこういうことか」と手にとるように判る気がしてくる。そして「なあんだ」と軽くかんがえるか「たいしたものだ」と重くかんがえるかは、それぞれの感じ方ということになるとおもう。

　第三の段階として、著者が「夢見のヨーガ」と呼んでいるアナハタ・チァクラ（みぞおちのところの霊的なセンター）への精神集中の修練がやってくる。著者のいうところによればこの段階で「この世」とちがうべつの世界を創り出し、そこで遊ぶことができるようになる。その創られた世界では、触れることも、見ることも、聞くことも、匂うことも、味わうことも、また考えることもできると書かれている。そして著者はこういう実体験とおなじ如実な感覚体験がこの創られた世界でできることが逆に「この世」も無常なイメージにすぎないのではないかと感じさせる根拠になるという興味ぶかいヨーガ体験観をのべている。

わたしは麻原彰晃のこの述懐を読みながら

ふたつのことを連想した。ひとつは『古事記』の初期神話やアイヌ神話にある「あの世」は「この世」と対称的でそっくりおなじ世界になっていて、死者はおなじ暮らしをしているというイメージだ。もうひとつは現在作られるいちばん高次な映像体験であるバーチャル・イメージの世界だ。そこでは映像の世界に自分が入りこんで、触れることも、見ることも、聞くことも体験できる感じになる。わたしはこの未開、原始の世界と超現在の世界の両方に通底したイメージ体験は、著者が記述しているアナハタ・チァクラの体験と関係があるとおもった。

第四番目に、ヴィシュッダ・チァクラ（のどぼとけの霊的センター）を開発するための精神集中によって、時間や空間を超えた場所に移動できる（幻身のヨーガ）。ある人が渋谷のバス停で著者を見かけたが、その時刻この段階の三昧をやりすぎて気絶していたという経験を述べている。顔や体つきが瞬間的に変わってしまうことがある。

ここの記述も役の行者の伝説みたいで興味ぶかい。民間伝承にあるこの種の説話は著者のヨーガ体験観からすれば「普通の人間」が時として偶然こんな体験に出会ったり、未開の心性では普通にありうることだったことを暗示している気がする。

第五番目にアージュニァー・チァクラ（眉間の霊的センター）に精神を集中する段階がやってくる。巨大な球体光のなかに自分が溶け込んだ感じになる。頭頂と心臓から二本の赤紫色の光がでて、この球体光と結ばれる。中心の透明な部分に細かい点が無数にうごいていて一粒一粒が情報の塊で、中心の点は宇宙レベルの情報、外側にゆくほど個人レベルの情報になる。他人から予言を頼まれたときはここで情報を得ると著者は記している。そのうちにアージュニァー・チァクラが崩壊して、常時この光の世界にいられるようになって、〈光のヨーガ〉が完成する。

もうこのくらいのところで、わたしが興味ぶかくて仕方がなかったこの本の中心部はつきている。もしかするとオウム真理教の中心部もこのヨーガの修練による「死と転生」のイメージの産出や、産出された「死と転生」のあとの世界（死後のイメージの世界）を自在に作りだし、自在に遊行する心的体験にあるのかもしれない。わたしの興味と関心を改めて箇条書きにするとつぎのようになるとおもう。

(1)未開や原始の時代にはオセアニアや西南アジアや北アジアの種族にとって普通の実体験の世界で、現在のこの地域では痕跡しか残っていない心的な体験の世界を、ヨーガの修練で産出するのが、著者たちの信仰の中心ではないのかとおもえる。

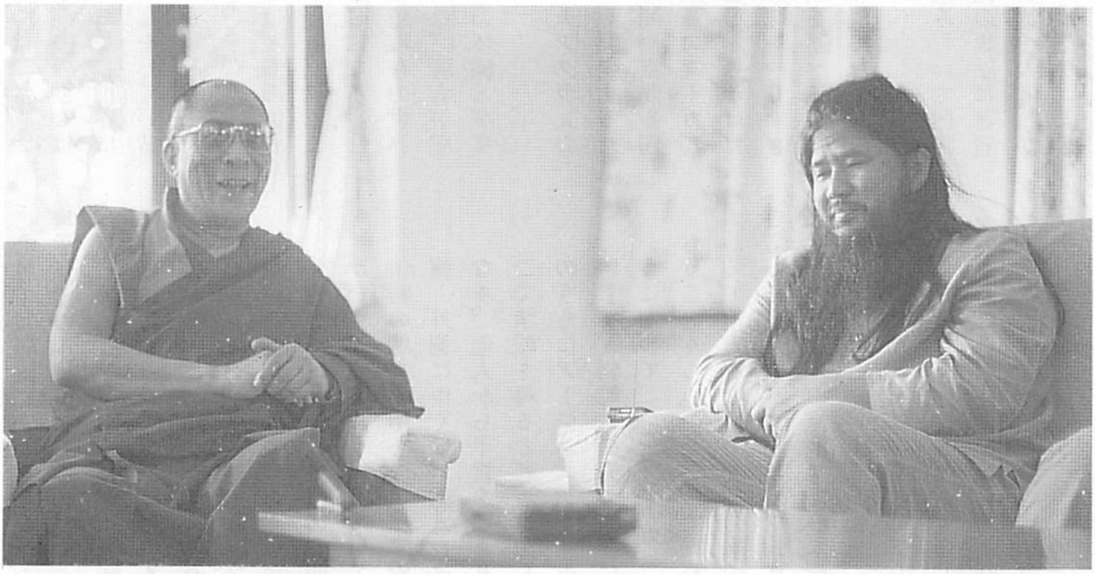
(2)わたしの関心にひき寄せれば、この著者が生み出し、記述している肉体や感覚の体験は、分裂病者が無意識の強迫から作りだしている体感や感覚異常の体験の世界を積極的に自在に作ることができていることを意味するのではないか。

(3)ヨーガの修練で臨死の体験のイメージ、死後の体験のイメージ、そこから子宮や卵子のなかに入り込んでふたたび転生したというイメージを、連続したプロセスとして産出できることが、生と死を超えた永生という理念をつくる根拠になっている。

(4)浄土教以前にあった仏教各派の修行が何をやっていたのかが、この本の記述でとてもよく理解できる気がする。

(5)何はともあれ、これほど如実に微細にヨーガの修練の過程を記述した本にお目にかかったことがないから、わたしにはきわめて貴重な本だった。

聖者からのメッセージ

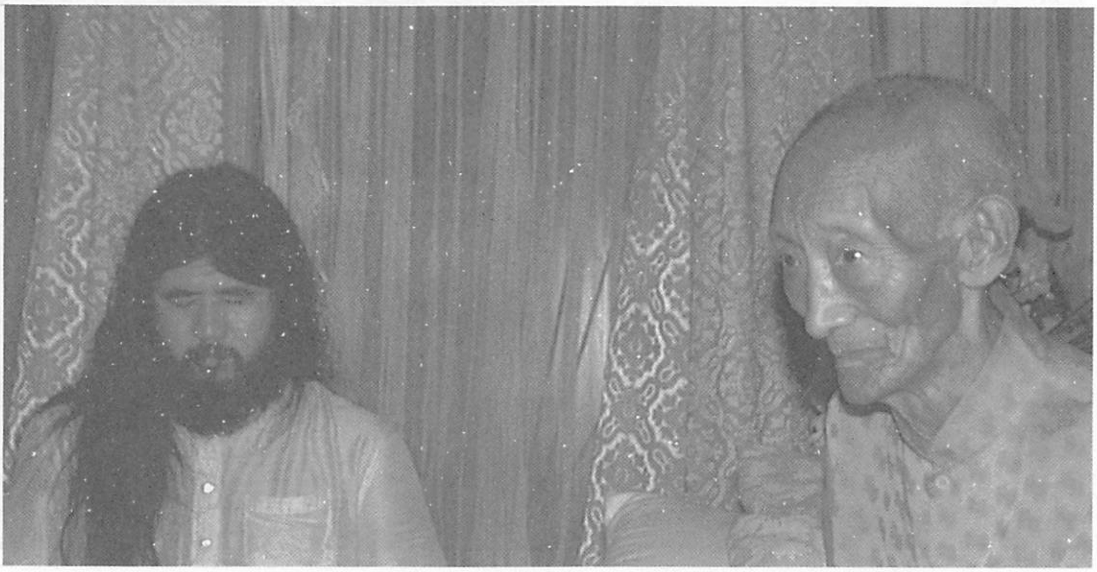


ダライ・ラマ法王

（チベット仏教の政治・宗教の最高指導者）

「あなた（＝麻原尊師）が日本に本当の宗教を広めなさい。あなたならそれができる。」（87年２月 インド・ダラムサラにて）

「オウムは宗教的・社会的活動を通じて、人々の覚醒を促すように努力する団体です。瞑想の実践法を人々に指導するとともに、オウムの人たちは大乗仏教の伝統を引き続き実践しています。」（89年５月 親書）



故カール・リンポチェ師

（チベット仏教カギュー派総帥）

「今生のわたしたちは大きな幸運に恵まれています。それは、仏陀が現われて法を説き、その法が今なおここに存在している時代に、わたしたちは転生したからです。……それは皆さんのグル、麻原彰晃尊師です。」（88年８月 オウム真理教福岡支部道場にて）

「尊師は偉大な智慧と、偉大な法の理解、そして大いなる愛、すべてのものを助けようという願望を持っておられます。」

（88年８月 同名古屋支部道場にて）

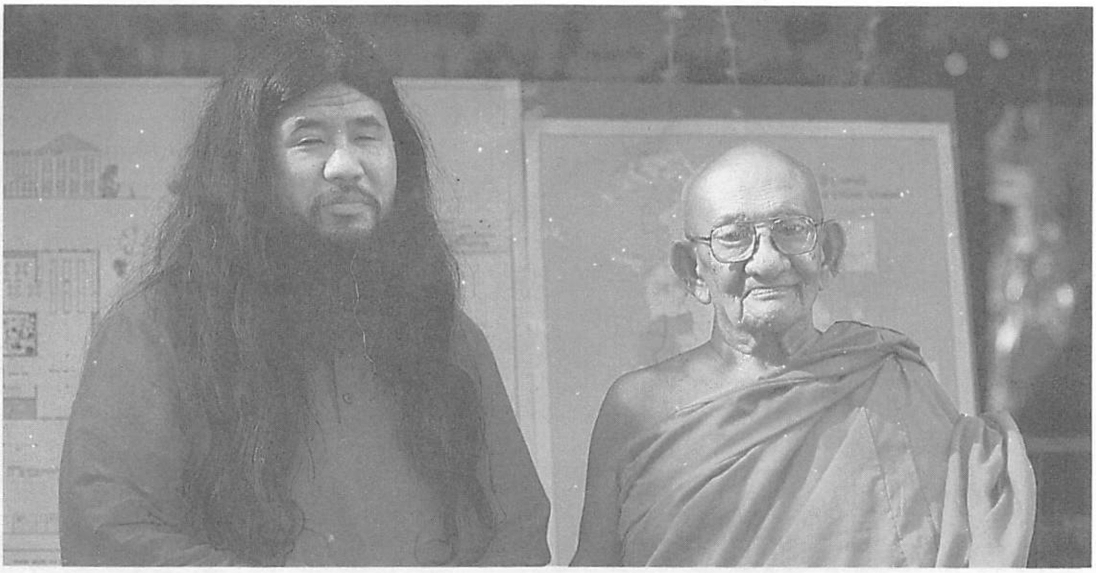


カムトゥール・リンポチェ師

（元ダライ・ラマ法王宗教局長：チベット仏教ニンマ派の高僧）

「あなた（＝麻原尊師）は高い悟りを得ている。イェシェー（完全なる絶対なる神の叡智）のステージだ。完全にあなたの生きている意味合いは、衆生を済度するためである。」（91年5月 インド・ダラムサラにて）

「麻原尊師は公の協力が得られた場合には、真に多くの人々に受け入れられる仏教の師として、日本に真の法を再び確立できるお方です。」（89年5月 親書）



アーナンダ・マイトリー高弟

（仏教国スリランカナンバーワンの瞑想家であり学者として同国国民から尊敬を集めている聖者：高弟とは「長老」の意）

「初めて尊師にお会いしたとき、尊師が今の時代、この地球に現われた偉大な聖者の一人であることを理解しました。尊師は偉大な宗教的師です。精神的に非常に高いレベルに達している方です。わたしは多くの修行者、グル（霊的指導者）に会いましたが、尊師ほど素晴らしいグルには会ったことがありません。」

（92年5月　スリランカ・バランゴダにて）



スワミ・アカンダナンダ

(歴史上傑出したヨーガ行者ラーマ・クリシュナ・パラマハンサの孫弟子：功徳の行者と呼ばれている)

「あなたには特別の使命がある。……近い将来、日本はほとんど破壊されるでしょう。それは神の意思なのです。そのときに、歴史に姿を現わす新しい人類を率いなければならないのが、あなたです。」

「あなたには特別の任務がある。それは日本人を高い精神状態へと引き上げることです。」(86年 インド・ウッタルカシにて)